高岡市埋蔵文化財調査概報第15冊

越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ

—平成２年度伏木測候所地区の試掘調査—

1991年３月

高岡市教育委員会

序

ＪＲ氷見線の伏木駅より，西側台地上の「勝興寺」に向かう参道の脇に伏木測候所があります。明治42年に建設された庁舎は，今もそのままの形で存在し，業務が行われています。この敷地の一角に「越中国守館址」の碑が立っています。一般に国守館址と理解され，万葉の遺跡の一つとして，多くの文学や歴史の愛好家の来訪地となっています。

奈良時代の越中国の国司の居館が，小矢部川や富山湾を臨む景勝の地に建てられていたことが，万葉集の越中国に関する歌より窺われます。伏木測候所もこのような眺望のよい地点に位置しています。

昭和61年度に開始した「越中国府関連遺跡発掘調査事業」も，５箇年計画の最終年度となりました。今回は，この伏木測候所の敷地を主要な対象地として実施しました。調査の結果，当地が奈良時代以来，種種利用され，多くの歴史が積み重ねられてきたところであることが判明いたしました。

今回の調査に当たり，御協力頂きました，富山地方気象台，伏木測候所，勝興寺，芹沢貢氏をはじめ，地元の皆様，関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成３年３月31日

高岡市教育委員会
教育長　篠　島　　満

例　言

1．本書は，越中国府関連遺跡に対する試掘調査の概要報告書である。
2．本調査は，平成２年度国庫補助金の交付を受けて，高岡市教育委員会が実施した。
3．調査地区は，以下の２箇所である。
(1) 伏木測候所地区（測候所地区と略称）
高岡市伏木古国府12－５
(2) 芹沢貢地区
高岡市伏木一宮２丁目259
4．調査期間は，平成２年８月１日から12月４日までである。
5．本調査は，高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し，社会教育課長佐野嘉朗，文化係長河合甚郎が総括をした。
6．本調査は，以下の３氏の指導のもとで行った。
古岡英明，市文化財保護審議委員
小島俊彰，市文化財保護審議委員
西井龍儀，富山考古学会会員
〈順不同，敬称略〉
また，出土遺物について酒井重洋氏（富山県埋蔵文化財センター）より，御教示を賜った。
7．図面の方位は真北（座標北）である。
8．本書の執筆は，山口が担当した。

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　伏木測候所地区 …… 7

1．概　　況 …… 7
2．遺　　構 …… 10
3．遺　　物 …… 12
4．小　　結 …… 14

Ⅲ　芹沢貢地区 …… 15

Ⅳ　結　　語 …… 17

図　面　目　次

図面1　遺物実測図　測候所地区
図面2　遺物実測図　測候所地区
図面3　遺物実測図　測候所地区
図面4　遺物実測図　測候所地区
図面5　遺物実測図　測候所地区
図面6　遺物実測図　測候所地区

図　版　目　次

図版1　遺構　測候所地区
1．遠景（北東上空）
2．遠景（南西上空）
図版2　遺構　測候所地区
1．北側トレンチ全景（西）
2．北側トレンチ全景（東）
図版3　遺構　測候所地区
1．南側トレンチ全景（東）
2．南側トレンチ全景（南）
図版4　遺構　測候所地区
1．SB01全景（西）
2．SB01全景（東）
図版5　遺構　測候所地区
1．SC01全景（南）
2．SC01全景（南西）
図版6　遺構　測候所地区
1．SB01近景（北東）
2．SC01近景（南）
図版7　遺構　芹沢A地区
1．全景（東）
2．全景（西）
図版8　遺構　芹沢B地区
1．東側トレンチ近景（東）
2．中央トレンチ近景（東）
図版9　遺物　測候所地区
土器
図版10　遺物　測候所地区
1．土器
2．円面硯
図版11　遺物　測候所地区
1．八尾窯の製品（外面）
2．八尾窯の製品（内面）
図版12　遺物　測候所地区
1．製塩土器（外面）
2．製塩土器（内面）

挿　図　目　次

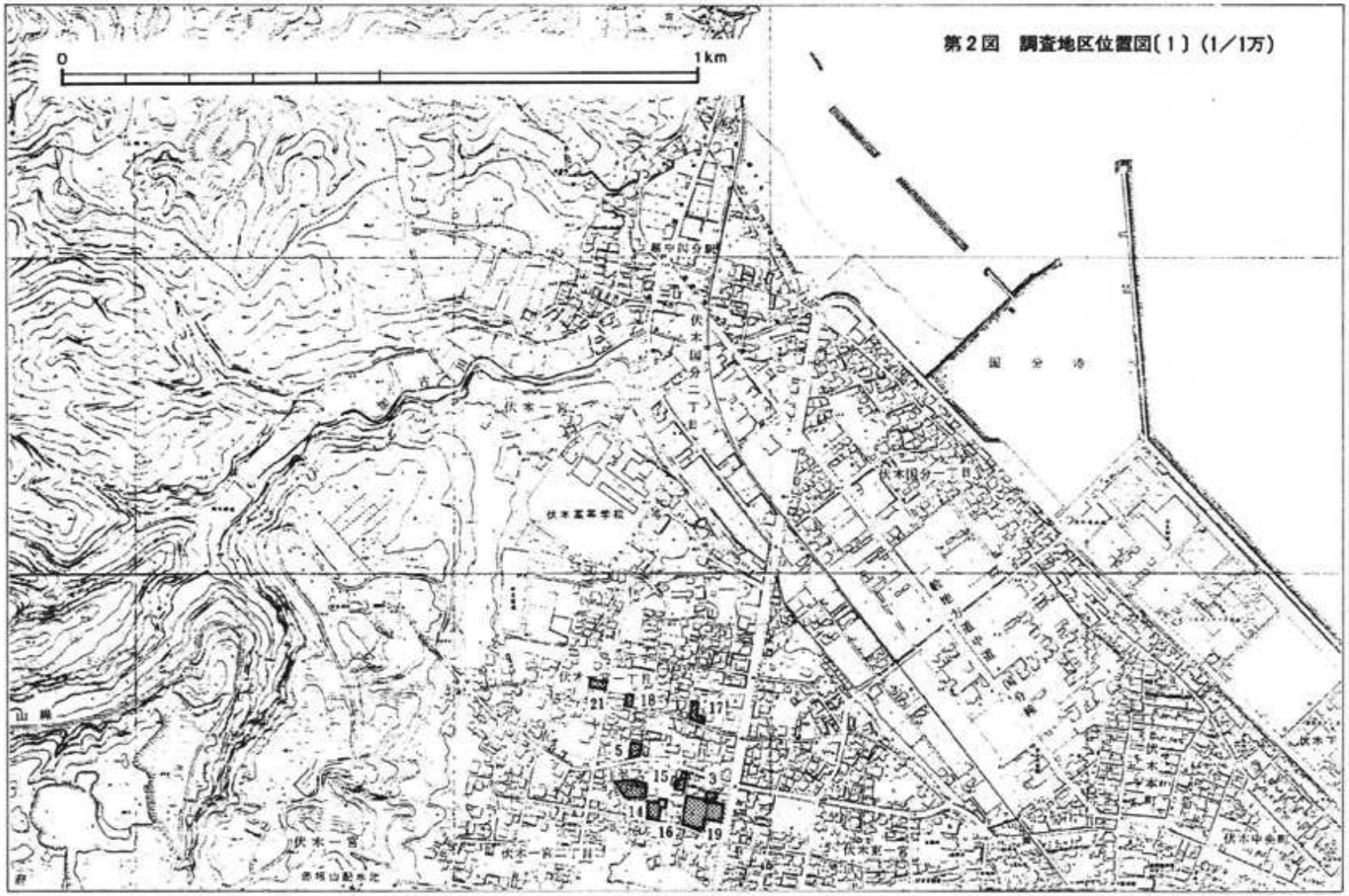
第1図　遺跡位置図（1／5万）……1
第2図　調査地区位置図〔1〕（1／1万）……2
第3図　調査地区位置図〔2〕（1／1万）……3
第4図　測候所地区位置図（1／5,000）……7
第5図　測候所地区トレンチ配置図（1／500）……9
第6図　測候所地区遺構図〔甲〕（1／200）……10
第7図　測候所地区遺構図〔乙〕（1／200）……11
第8図　円面硯実測図（1／2）……13
第9図　芹沢A地区位置図（1／5,000）……15
第10図　芹沢B地区遺構図（1／200）……16
第11図　土錘実測図（1／2）……16

Ⅰ 序　説

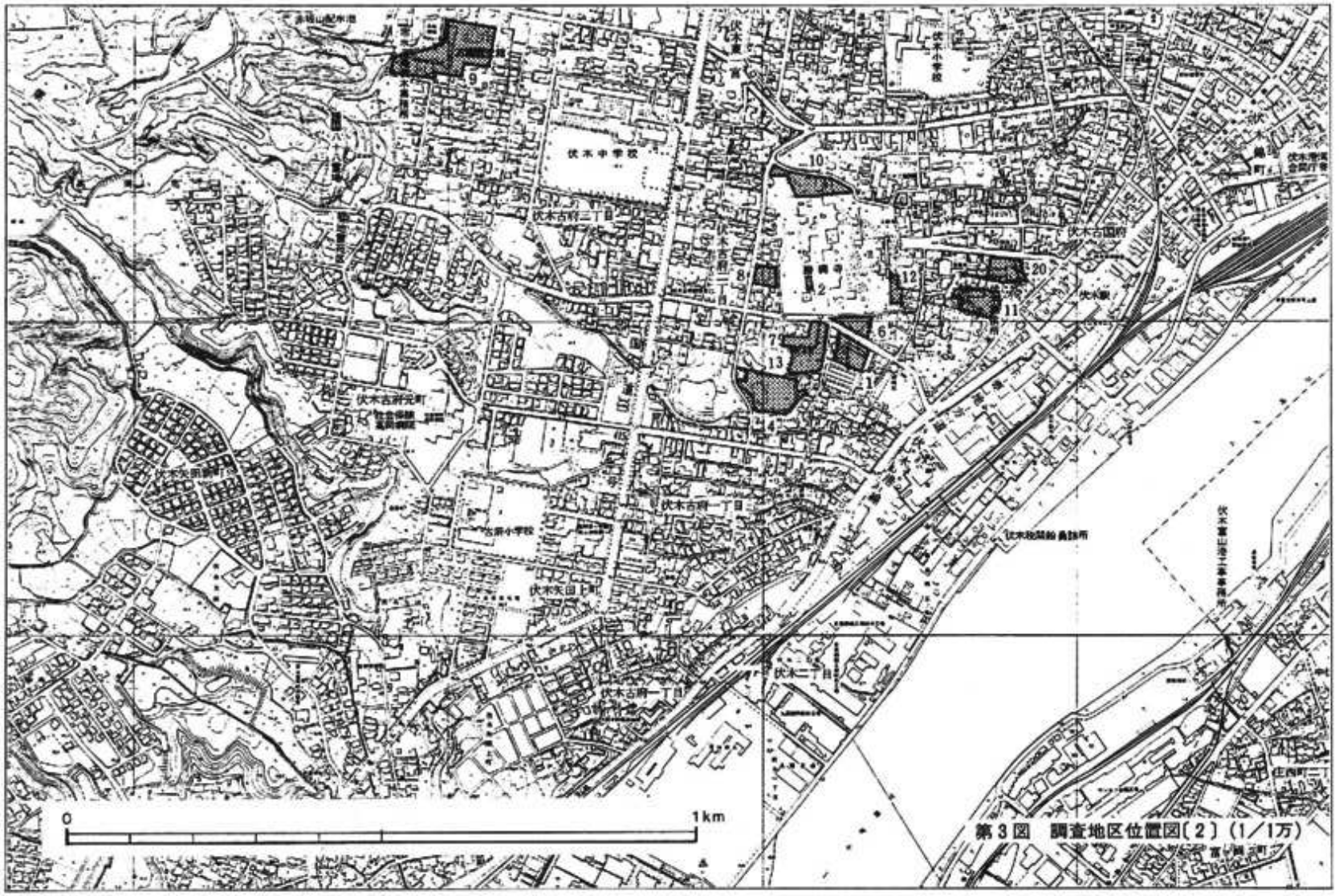
遺跡概観

高岡市街地の北方に二上山の山塊が聳え立っている。主峰（東峰）は 273m を計り，城山（西峰）は 258m を計る。この山麓には，山塊を取り巻くように段丘が発達している。この中で東麓に位置するのが伏木台地である。伏木台地は，南北2.15km，東西1.75kmの規模で，上位と下位との２つの段丘から構成されている。

第１図　遺跡位置図（1／5万）



第２図　調査地区位置図（１）（1／1万）



第３図　調査地区位置図〔２〕（1／1万）

No.	記号	地区	所有者・負担等	所在地	発掘面積	発掘調査期間	備考
1	F1	古府宿舎	大蔵省北陸財務局 高岡古府宿舎建設	伏木古府2丁目67番	707.0㎡	昭和60年10月5日 ～12月3日	美野下遺跡調査概報
2	F2	勝興寺 本堂裏	勝興寺境内避雷針埋設	伏木古府17番	20.4㎡	昭和60年11月27日 ～12月4日	溝・掘り方を確認
3	F3	国分寺北接	農地転用・田上魚店他 昭和61年度県費補助	伏木一宮2丁目3番	60.0㎡	昭和61年5月9日 ～5月11日	瓦粘土採取のため撹乱
4	F4	御亭角	小谷秀範氏所有地 昭和61年度国庫補助	伏木古府2丁目3番	620.0㎡	昭和61年5月19日 ～7月28日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅰ
5	F5	国分寺東側	東亜合成社宅 昭和62年度国庫補助	伏木一宮1丁目1番	12.0㎡	昭和62年4月21日 ～4月23日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ
6	F6	勝興寺南接	勝興寺所有地 昭和62年度国庫補助	伏木古府2丁目1番	456.0㎡	昭和62年8月24日 ～11月10日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ
7	F7	勝興寺南側 〔1〕	勝興寺所有地 昭和62年度国庫補助	伏木古府2丁目3番	80.3㎡	昭和62年8月24日 ～11月10日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ
8	F8	勝興寺西側	横幸秀氏所有地 昭和62年度国庫補助	伏木古府2丁目7番	8.7㎡	昭和62年8月24日 ～11月10日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ
9	F9	万葉歴史館 建設予定地	高岡市	伏木一宮1丁目 14番外	329.0㎡	昭和63年3月30日 ～4月20日	瓦粘土採取のため撹乱
10	F10	勝興寺北接	勝興寺所有地 昭和63年度国庫補助	伏木古国府17番	95.2㎡	昭和63年8月22日 ～12月23日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ
11	F11	妙法寺	妙法寺境内 昭和63年度国庫補助	伏木古国府12番	39.0㎡	昭和63年8月22日 ～12月23日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ

付表　越中国府関連遺跡発掘調査一覧表〔1〕

No.	記号	地区	所有者・負担等	所在地	発掘面積	発掘調査期間	備考
12	F12	矢田安太郎	矢田安太郎他所有地 昭和63年度国庫補助	伏木古国府3番	17.1㎡	昭和63年8月22日 ～12月23日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ
13	F13	勝興寺南側〔2〕	勝興寺所有地 昭和63年度国庫補助	伏木古府2丁目3番	418.0㎡	昭和63年8月22日 ～12月23日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ
14	F14	坂口幸雄	坂口幸雄所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮1丁目601	19.3㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
15	F15	松谷二郎	松谷二郎所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮1丁目584-1	36.6㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
16	F16	立野一朗	立野一朗所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮1丁目592. 593	71.6㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
17	F17	栗田喜代治	栗田喜代治所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮2丁目434-1. 485-1	13.3㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
18	F18	向一次	向一次所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮2丁目526	155.3㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
19	F19	海員会館	伏木海陸運送㈱所有地 平成元年度国庫補助	伏木一宮1丁目577	277.2㎡	平成元年8月28日 ～12月5日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅳ
20	F20	伏木測候所	伏木測候所所有地 平成2年度国庫補助	伏木古国府12-5	170.0㎡	平成2年8月1日 ～12月4日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ
21	F21	芹沢貴	芹沢貴所有地 平成2年度国庫補助	伏木一宮2丁目259	28.0㎡	平成2年8月1日 ～12月4日	越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ

付表　越中国府関連遺跡発掘調査一覧表〔2〕

越中国府関連遺跡と総称している遺跡は，この伏木台地に位置する。伏木台地全体が総体的に遺跡地帯（埋蔵文化財包蔵地）と判断し，内容把握に努めているところである。

越中国庁跡は、下位段丘の中央部分に在存していたものと推定されている。現在，浄土真宗本願寺派の大寺院「勝興寺」の境内地となっているところである。

越中国分寺跡は，下位段丘の北部に比定されている。国庁推定地の北西約 600ｍの地点である。現在，真言宗の寺となっている国分寺の境内地を中心に寺域が想定されている。また，この境内地約1,538㎡が越中国分寺跡として県の指定史跡になっている。

調査経過

国分寺跡を含むところの越中国府関連遺跡を対象とした発掘調査の流れを概述してみる。

戦前におけるものとしては，昭和11年に堀井三友氏らによる国分寺跡の発掘調査が唯一のものである。その後30年間伏木台地における発掘調査は実施されずにきたが，古墳の発見や各時代の遺物の出土，富山考古学会による巡見，古岡英明氏による基礎資料の収集や研究論文の発表等があり発掘調査の必要性が強調されてきたところであった。そして，昭和41年に至り，富山県教育委員会・富山考古学会会員による調査団が結成され，国分寺跡と国府跡とに対して，発掘調査が実施されることになった。国分寺跡の調査は，その中心と目されていた境内地におけるものである。国府跡の調査は，国庁推定地の南側一帯，御亭角・美野下地区（御亭角遺跡）におけるものである。ここから白鳳時代の瓦が出土することより，廃寺跡（御亭角廃寺）とされ，国庁・国府との関連も指摘されてきた地区であった。

この昭和41年の調査成果を発展させる形での発掘調査は実施されず，約20年の歳月が流れることになった。昭和57・58年に実施された小杉町丸山遺跡の発掘調査によって，御亭角遺跡出土の瓦の生産地の一つが，この遺跡であることが判明し，伏木台地の遺跡の問題が再び注目されることとなった。昭和60年に，御亭角遺跡の東側，美野下地区において，大蔵省北陸財務局の宿舎建設により，多量の遺物が出土し，緊急に発掘調査が実施された。

一方，高岡市教育委員会は，越中国府関連遺跡における計画的な発掘調査の実施を検討・準備しており，昭和61年度から実施に移されることになった。これは，５箇年に亘るものであり，今回ここに報ずるものはこの調査の一環として実施した平成２年度分（最終年度）のものである。各年度ごとの主要な調査地区は，以下の通りである。

１．昭和61年度；国庁推定地付近，御亭角地区
２．昭和62年度；国庁推定地付近，勝興寺周辺地区
３．昭和63年度；国庁推定地付近，勝興寺周辺地区
４．平成元年度；国分寺跡付近
５．平成２年度；国庁推定地付近，伏木測候所地区

上記の５箇年計画以外にも一部発掘調査を実施してきており，昭和60年度から平成２年度に至る発掘調査を，第２・３図と４・５頁の付表で示しておいた。

Ⅱ　伏木測候所地区

1．概　　況

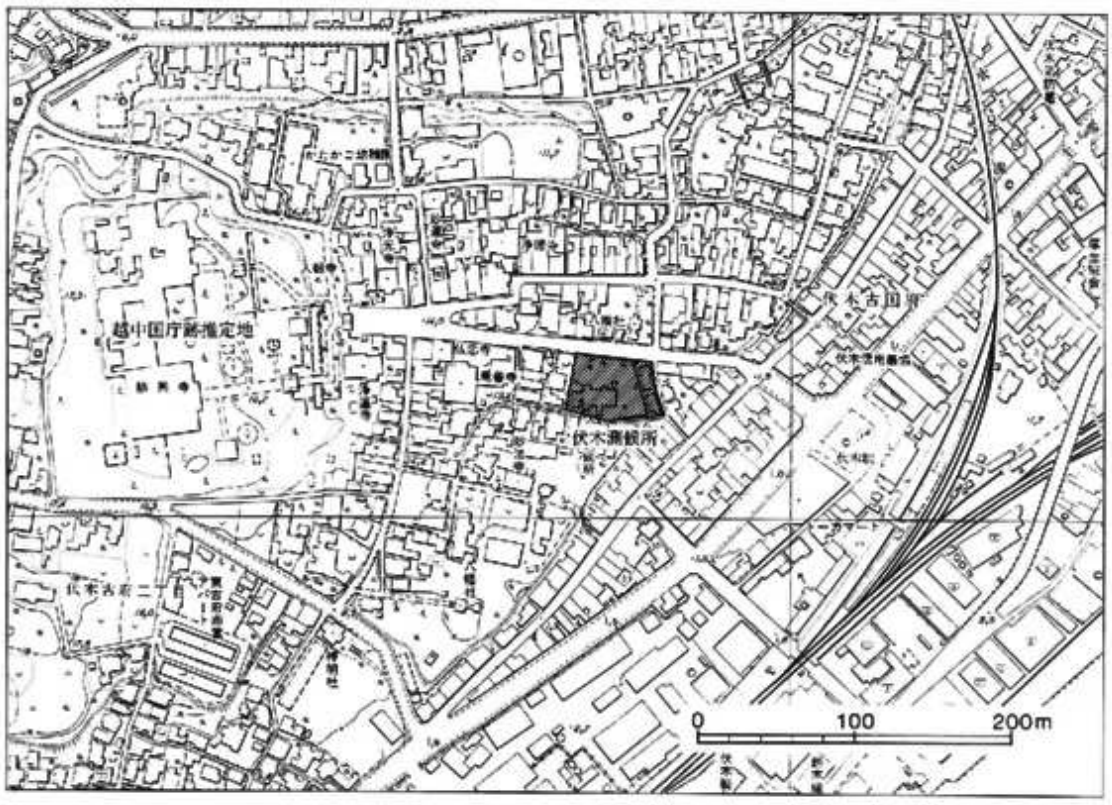
調査地区の位置

調査対象地は，伏木古国府12－5に所在する。越中国庁址推定地の勝興寺境内の東側約 200m の地点に位置する。富山地方気象台伏木測候所の構内で，標高約13m を計る。周囲は勝興寺の門前で，子院や宅地となっている。勝興寺の東側一帯は，字「東館」で，当地区もこの中に入る。

当地区は，下位段丘の内の中部台地の東端であり，眼下に小矢部川を臨み，眺望に優れた地点でもある。当地区の南南西側約 150m の地点には，古府八幡社が鎮座している。

国司の館

当伏木測候所の敷地には，歌碑が立っている。一面には「越中国守館址」と刻まれ，もう一面には「朝床に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつつ唱ふ船人」との歌がみえる。大伴家持が天平勝宝



第4図　測候所地区位置図（1／5,000）

2年3月に詠んだ歌で，『万葉集』巻19－4150に載っているものである。

この「国守の館」のことも含めて，越中国府に関する諸施設については「国司の館址」のことが最も注目されてきている。これは次の3点の資料からである。

1．『万葉集』の越中関係の歌の中に，守・介・掾・大目・小目の館が登場する。

2．国司の館に関係するとされる小字名が伏木台地に幾つか存在する。

北部台地；「大立」「片原立」「五平立」

中部台地；「串ケ館」「岸ケ館」「東館」

3．地形や土塁の存在。

伏木台地は，侵食谷により複雑な地形を呈している。変化に乏しい所に位置している国府に比べて，諸施設を立地の観点より論じることが可能である。また，土塁が近年まで各所に存在し，一部は現在も国庁跡推定地付近に残存し，国司の館との関係で注目される。

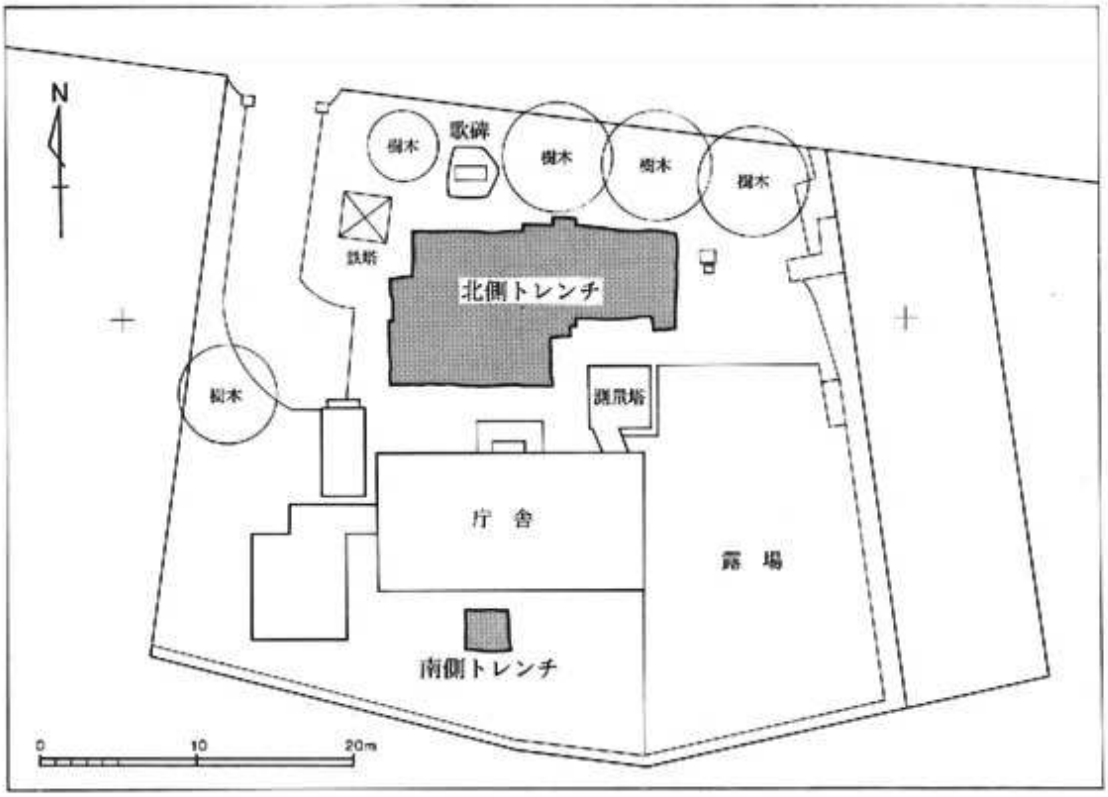
越中の国司館址については，早く，江戸時代後期に富田景周によって勝興寺に比定されている（富田1821）。その後，鴻巣盛廣氏の北陸万葉関係の古地を探る研究の中にみえ，勝興寺及びその付近に国庁跡や国司の館址が索められている（鴻巣1936）。田辺武松氏はさらに具体的に論じられ，国守館址を伏木測候所から勝興寺総門南側一体とし，地名が「東館」であることにも触れられている。また大目秦忌寸八千島の館址を，勝興寺より北東約 300m の伏木小学校（当時の伏木国民学校）の地とされた（田辺1942）。戦前すでに，伏木測候所と伏木小学校には国守館址及び大目館址を示す標柱が立っていたとのことである。戦後に至り，昭和30年代前半には，伏木測候所に国守館址についての説明板が立てられ，さらに，昭和57年に前述した歌碑の設置をみている。このような経過等より，「伏木測候所付近（特に測候所内）＝国守館址」説が，通説と受け取られている。しかし，十分論証された理由ではなく，また測候所付近＝国守館址説に反対する立場もあり（黒川1974），現在のところ，検討を要すると言える。

発掘調査の経過

当地区の敷地面積は，1,774㎡を計る。今回発掘調査したのは，この内170㎡である。当初，庁舎の三方，すなわち，北・南・西側にトレンチの設定を企図したが，実施したのは，北側と南側の2箇所となった。

北側は，庁舎の前庭部に当たり，駐車場等に使われている所である。幅3mで長さ18mのトレンチを東西に設定して，発掘調査を開始した。約30cmの盛土・表土を除去して，遺構の確認に努めた。この結果，掘り方や溝状の遺構が検出できた。しかし，発掘面積が少なく，遺構の性格等の把握が困難であった。このため関係者との協議を経て，トレンチを拡張することになった。拡張は，北側へ，幅3mで長さ16m，南側へ，幅4mで長さ10mの範囲で実施した。

南側は，庁舎の裏側に当たり，樹木等もある所である。2×2mのトレンチを一箇所設定した。遺構状の落ち込みが検出されたが，空間的にみて拡張することが難しく，これのみで，調査を終えることにした。



第5図　測候所地区トレンチ配置図（1／500）

遺構図と座標

今回報告する遺構図は北側トレンチのものである。南側トレンチは省略した。北側トレンチの遺構図は，第6図として検出した遺構をすべて示したが，これのみでは煩雑なので，小ピット以外の遺構として認定したものを，第7図として明示した。

遺構図の方眼（グリッド）は3m四方である。東西をX軸，南北をY軸とする。平面直角座標系の第7座標系の原点（北緯36° 00′ 00″，東経 137° 10′ 00″）より，X＝1，Y＝1の地点は，西へ9,630m，北へ87,585m向かった位置である。

検出遺構

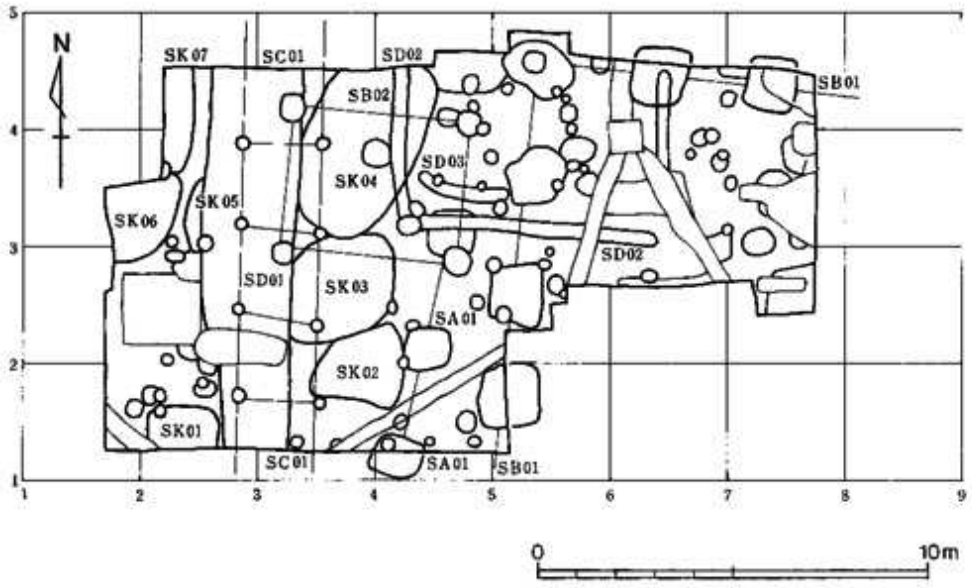
検出された遺構は，以下の通りである。

掘立柱建物址2棟（SB01・02），棚址1条（SA01），廊址1条（SC01）

土坑7基（SK01～07），溝3条（SD01～03）

出土遺物

土器・陶磁器類と円面硯が1点出土した。土器・陶磁器類は，奈良時代から戦国時代までのものである。土師器・須恵器・灰釉陶器・白磁・八尾窯の製品・製塩土器である。



第6図　測候所地区遺構図〔甲〕(1/200)

2．遺　構

掘立柱建物址

SB01　南北棟？の掘立柱建物址。規模は桁行3間（8.55m）乃至4間以上×梁行3間（推定，9m）である。棟の方位は，真北に対して6度東へ偏っている。柱間寸法は，桁行2.85m等間，梁行3.0m等間を計る。掘り方は方形で，一辺140～160cmを計る。東側と南側は調査地区外となる。SD02と重複し，掘り方の一つは，これに一部切られている。また，小ピットや攪乱に切られている掘り方もある。

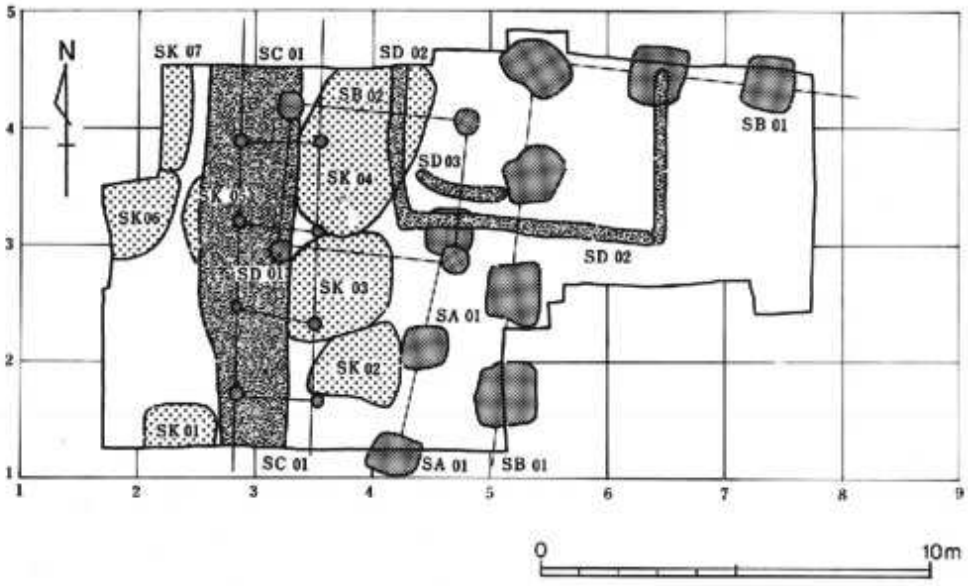
SB02　東西棟の掘立柱建物址。規模は桁行1間（4.5m）×梁行1間（3.6m）である。棟の方位は，真東に対して6度南へ偏っている。掘り方は円形で，径50～70cmを計る。SA01，SC01，SK03・04，SD01・02と重複し，SA01，SD01を切っている。

柵址

SA01　南北に延びる柵址。規模は2間（6.0m）以上である。方位は，真北に対して13度東へ偏っている。柱間寸法は，3.0m等間を計る。掘り方は方形で，一辺約120cmを計る。北側の掘り方は，SB02，SD02に切られている。

廊址

SC01　南北に延びる単廊址。規模は桁行3間（6.6m）以上×梁行1間（2.1m）である。棟の方位は，真北に対して2度東へ偏っている。柱間寸法は，桁行2.0～2.3m，梁行2.1mを計る。



第7図　測候所地区遺構図〔乙〕(1/200)

掘り方は円形で，径50～80cmを計る。ＳＢ02，ＳＫ02～04，ＳＤ01と重複し，ＳＫ03・04，ＳＤ01を切っている。

土坑

ＳＫ01　隅丸方形？の土坑。規模は南北110cm以上，東西180cmを計る。

ＳＫ02　不正形の土坑。規模は長軸240×短軸180cmを計る。

ＳＫ03　不正隅丸方形の土坑。規模は長軸290（想定値）×短軸250cmを計る。ＳＢ02と重複する。ＳＣ01，ＳＫ04，ＳＤ01に切られている。

ＳＫ04　不正楕円形の土坑。規模は長軸490×短軸290cmを計る。ＳＢ02と重複する。ＳＣ01，ＳＤ01・02に切られている。また，ＳＫ03を切っている。

ＳＫ05　形態不明。ＳＤ01や小ピットに切られていて，一部のみ検出した。

ＳＫ06　不正楕円形？の土坑。一部のみ検出。

ＳＫ07　不正楕円形？の土坑。一部のみ検出。

溝

ＳＤ01　南北に走る溝。規模は，幅160～230cm計り，長さ9.7mにわたり検出された。ＳＢ02，ＳＣ01と重複し，これらの掘り方に切られている。また，ＳＫ03～05を切っている。

ＳＤ02　コ字状に走る小溝。幅約40cmである。ＳＢ01・02と重複する。ＳＢ01，ＳＡ01，ＳＫ04を切っている。

ＳＤ03　弧状に東西に走る小溝。幅約35cm，長さ2.4mを計る。ＳＢ02と重複する。

3．遺　物

土師器

椀類　図面１－101～123，図面２－124～160。すべてロクロ使用のものである。整理作業上の分類として，４つに分けて図示したので，これに沿って述べて行く。

A．101～106。口縁・体部が内湾して外上方へ拡がるものである。無高台の椀で底部には糸切り痕がそのまま付いている。

B．107～116。椀・皿類の高台部である。全体の形態が判明するものは108の１点のみである。これは口縁部が直線的に外上方へ開き，高台付皿に近い形態になっている。これに対して，体部が残存する107は，内湾して立ち上がる形態で，椀形になっている。高台部は，足高の107～114と低平で小さい115～116とに区分される。

C．117～123。内黒土器の椀である。全体の形態が判明するものは出土していない。口縁部の117～119と高台付底部である120～123である。

D．124～160。椀類の底部である。無高台のもので，底部には糸切り痕がそのまま付いている。底径は，3.4～7.0cmを計る。

皿類　図面３－161～195，図面４－196～221。以下のように５つに分類される。

A．161～164。ロクロ使用の小型の皿。高台は付かない。口径8.4～9.8，器高1.5～1.8，底径3.6～5.3cmを計る。

B．165～170。ロクロ使用で，底部が厚い皿になると考えたもの。後述のC類と明確に区別できないものもある。

C．171～193。柱状高台の皿。ロクロ使用で底部には糸切り痕が付く。このタイプの皿は，口縁部が欠損し，柱状部のみ残存している場合が多い。この中で，今回図示した171～173の３点は，全体の形態が判明するものである。法量は，口径8.7～9.0，器高2.5～3.0，底径3.9～4.8cmを計る。口縁部が欠損している174～193は，柱状部高1.2～2.0，底径2.8～5.1cmを計る。

D．194～195。非ロクロの皿。非ロクロの皿で後述のE類と異質なものを取り上げた。口縁部には２段の横ナデを施している。底部は弧状になる。

E．196～221。非ロクロの皿。平底の底部より，口縁・体部が外上方へ開く形態である。口径が8.5cmの小型品から，16.0cmの大型品まで法量的には幅広いが，大きくみて同一のものと考えた。調整手法は，体・底部をナデや指圧によって整え，口縁部を横ナデして外反させている。口端部内面は横ナデを施すことによってつまみ上げたような形態になる。ただし，このつまみ上げが弱いものやほとんどみられないものもある。平底である特徴は大型品に顕著に表れている。なかには弧状になるものがある。218～221等口径９cm以下の小型品は，丸底に近い底部になっている。

須恵器

杯　図面5－222～226。高台の付かない杯の222と高台付杯の底部の223～224，そして，口縁・体部片の225～226である。

杯蓋　図面5－227～229。高台付杯に伴う蓋である。227は偏平なもので，口縁部が下方へ短く折れるものである。228は高台付の皿になる可能性を残しているものである。天井部には大型環状のつまみが付く。229はつまみの付かない蓋であり，天井部はヘラ切りのままとなっている。口縁部は巻き込むように終わっている。

鉢　図面5－230。小破片のため，傾き・口径等が不明確である。バケツ形の形態になるものと推定している。把手が僅かに残存している。

瓶類　図面5－231～233。瓶の口縁部片の231～232と底部片の233である。

灰釉陶器

椀　図面5－234。いくぶん三日月型になる高台部が付く形態である。口径15.4，器高7.8cmを計る。釉薬は漬け掛けである。

白磁

椀　図面5－235。玉縁状の口縁部片である。口径16.0cmを計る。

八尾窯の製品

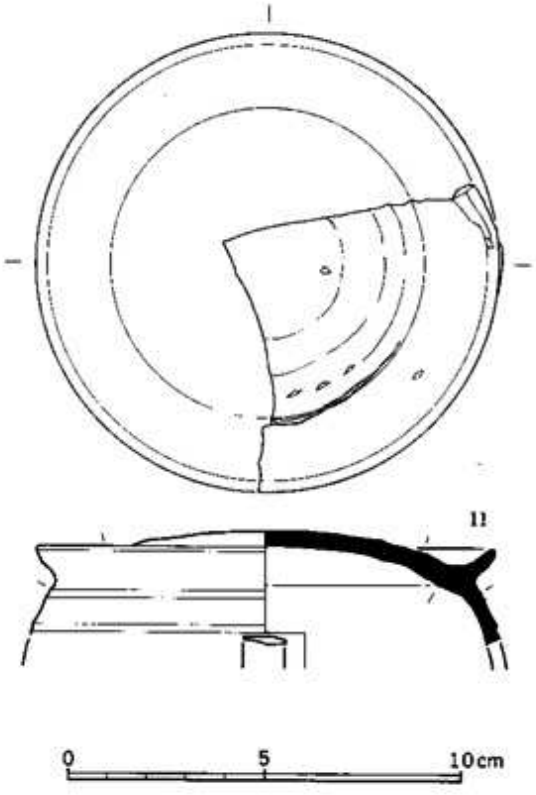
甕　図面6－236。口縁・肩部片の236のみ実測図で示した。他の胴部片は図版11で示した。

製塩土器

平底製塩土器　図面6－237～240。バケツ形の平底製塩土器の破片である。4点のみ実測図で示した。他の破片は図版12で示した。

陶硯

円面硯　第8図で示した11である。硯部が約4分の1と脚上部が一部残存している。外縁径は11.8cmを計る。陸部と海部との間に境が設けられてなく，硯面が凸面状になるものである。脚上部に方形になると考えられる透かし穴が1箇所僅かに確認することができる。色調は青灰色である。



第8図　円面硯実測図（1/2）

4．小　結

遺物の時期

出土した遺物は既述の通り，円面硯が１点と土器・陶磁器類である。遺物は遺構確認時のものがほとんどを占める。今回は明確な形での遺構の掘り下げは実施していない。遺構が重複しており，遺構を確認するため包含層（遺構の覆土）を掘り下げたが，その時の遺物が多い。遺物の時期は，大きく３つに分類できる。

１．奈良時代末～平安時代中期頃

奈良・平安時代の土師器・須恵器で明確に８世紀と断言できるものは少なく，８世紀末以降10世紀代のものまでが主体と考えられる。図示した土師器の椀類と須恵器が該当する。製塩土器は８世紀代のものによく見られる形態であるが，土師器や須恵器の年代観より，８世紀末以降のものとするのが妥当と判断される。円面硯は遡っても８世紀末のものであり，一応９世紀代のものとしておく。

２．平安時代末～鎌倉時代初期頃

特徴ある形態である土師器の柱状高台皿が数多く出土しており，このことから，12世紀ないし，この前後に一つのピークがあると判断される。土師器椀の一部や白磁椀もこの段階のものであろう。土師器皿の内，Ａ・Ｄ類もこの段階に含めたい。八尾窯の製品については，この時期と下記の次の時期の中間の段階のものと推定される。

３．戦国時代

京都系とされる，ロクロ未使用の土師器皿Ｅ類に代表される時期である。図示した通り，このタイプの皿は多く出土している。

遺構の時期

出土遺物や遺構の切り合い関係等より，一応遺構の時期を推定してみた。遺構をほとんど掘り下げていないこともあり，憶測の域を出ない。

１．奈良時代末～平安時代中期頃

掘立柱建物址ＳＢ01，柵址ＳＡ01

２．平安時代末～鎌倉時代初期頃

溝ＳＤ01，土坑の一部

３．戦国時代

掘立柱建物址ＳＢ02，廊址ＳＣ01，土坑の一部，小ピットの大半

遺構の位置

大型の掘立柱建物址は平安時代前期頃のものと推測され，越中国庁に付属する施設であった可能性が強い。また，戦国時代の遺構や遺物は，勝興寺周辺を特徴づけるものであり，城郭（古国府城）との関連を推定させるものである。

Ⅲ　芹沢貢地区

調査地区の位置

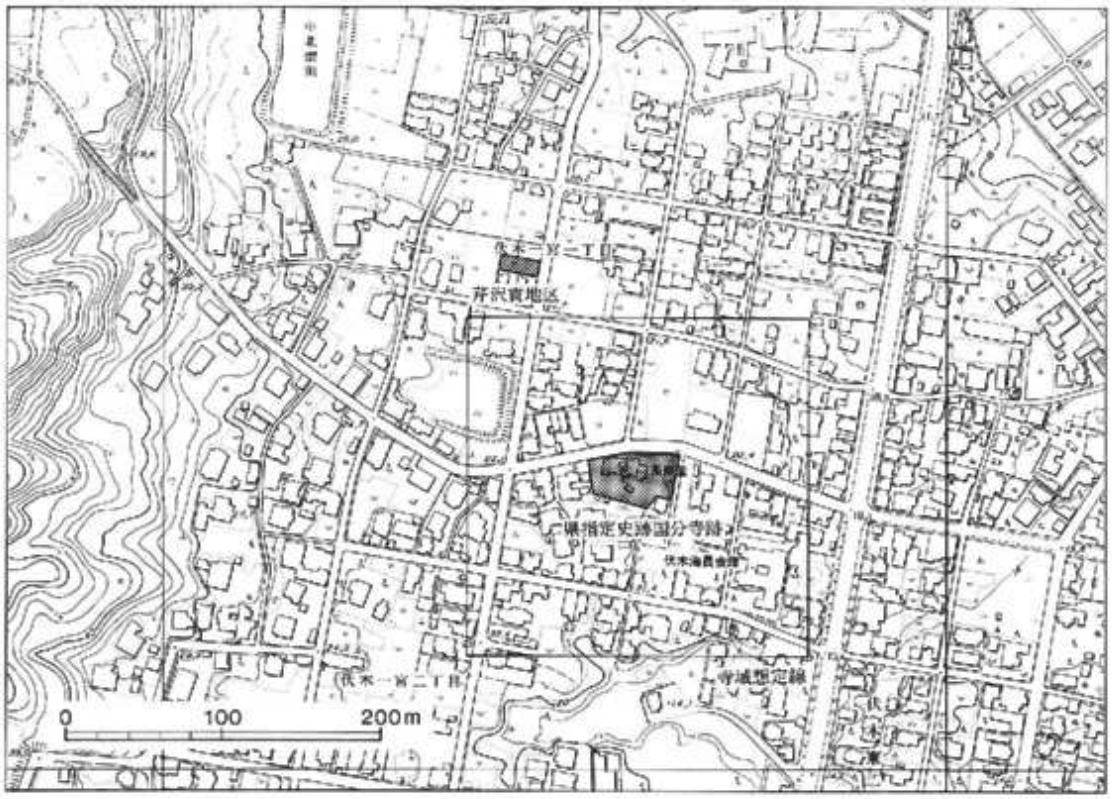
調査対象地は，伏木一宮２丁目259に所在する。県指定史跡越中国分寺跡の北西約150ｍの地点に位置する。水田の中の一角で，標高約22ｍを計る平坦地である。

当地区付近は字大門であり，当地区も含めて，国分寺跡の北西側一帯は「大門遺跡」とも称されている所である。字大門地内からは，越中国分寺所用の軒丸瓦が出土している。

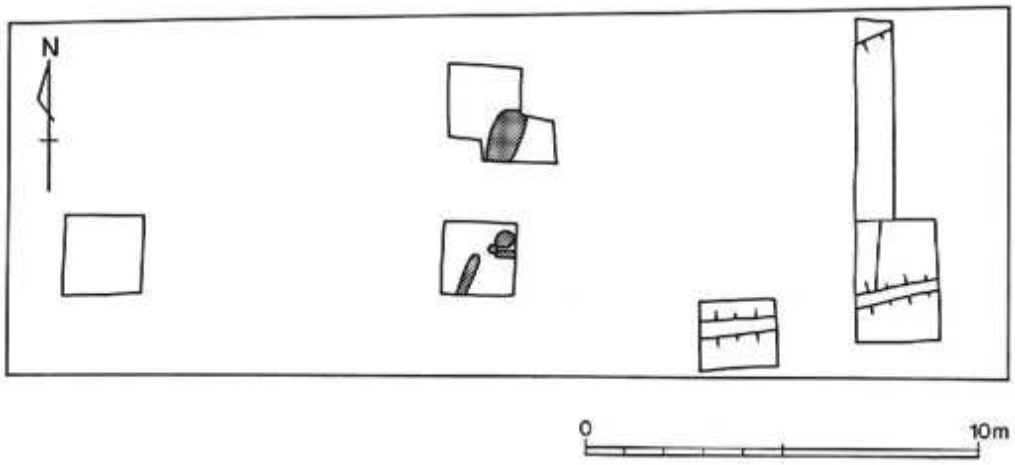
各トレンチの調査状況

当地区は，231㎡の面積を有する。今回発掘調査したのは，この内28㎡である。当初２×２ｍのトレンチを３箇所設定して掘り下げた。その後，拡張を行い，第10図のような発掘区となった。

調査地区の東側において設定したトレンチで溝状の遺構の一部と思われるものを検出した。これを追及するため，拡張とトレンチの新設，及び底面までの部分的掘り下げを実施した。しかし，結果として，近代の瓦粘土採集の攪乱であることが判明した。当初溝の壁と考えた部分も，旧畦



第９図　芹沢貢地区位置図（１/5,000）



第10図　芹沢貰地区遺構図（1/200）

畔であった。すなわち，畦畔の部分を残して，耕作部分の下の粘土を採掘した跡であった。

調査地区の中央部に設定した2箇所のトレンチでは，土坑やピットが検出された。そして一部の拡張も実施した。これだけでは遺構の内容把握にまで至らないので，発掘区の大幅な拡張の必要があった。しかし，湧水（粘土層の基盤層は透化しにくいので，地表水が表土＝耕作土と基盤層との間を流れる）が激しく，拡張には，本格的な作業が必要となるので，今回は，現状のままで終了することにした。

調査地区の北側において設定したトレンチでは，遺構は検出されなかった。

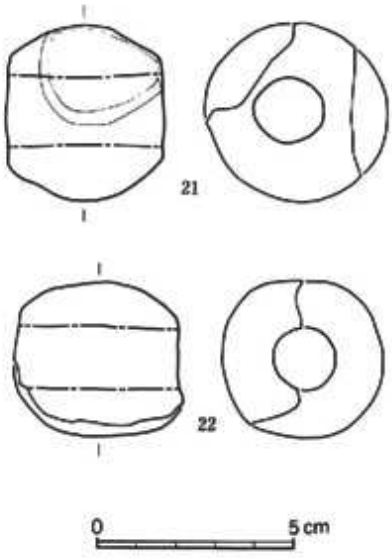
出土遺物

出土遺物は，土器・陶磁器類，瓦，土錘である。

土器・陶磁器類は，土師器・須恵器・珠洲・輸入青磁で，すべて細片である。須恵器では，8・9世紀頃のものが確認できる。珠洲では，甕や擂鉢があり，擂鉢では，密なオロシ目で口端部に波状文が付くものがある。

瓦はいわゆる国分寺期瓦の破片である。

土錘は，2点出土した，土師質柱状の土錘である。第11図で示したものである。21は，長さ4.0，径4.5，孔径1.7cmを計り，22は，長さ4.1cmを計るものである。



第11図　土錘実測図（1/2）

Ⅳ 結　語

越中国府関連遺跡

「越中国府関連遺跡発掘調査事業」として実施した調査は，名称の通り国府遺跡を幅広く認識しているが，それに接近する方法として，中核施設である国庁跡推定地付近と国分寺跡（国分僧寺）付近を対象として発掘調査を実施してきた。手を広げ過ぎるよりも，目標を限定した方が捷径であると判断したことと，明確な国庁域なるものが存在したかどうか論議されている現段階において，限られた調査規模での範囲確認的な調査の有効性を疑ったためでもある。

国庁跡推定地付近

昭和61年度の御亭角地区，昭和62・63年度の勝興寺周辺地区，平成２年度の伏木測候所地区における調査である。勝興寺に南接する三角地より，国庁の官衙群と推定される奈良・平安時代の掘立柱建物址が多数検出されている。国庁推定地の東側の「東館遺跡」からも，奈良・平安時代の掘立柱建物址や掘り方・柱穴が検出されている。またこの時期の土器類等の遺物も多数出土している。これらの資料は，勝興寺付近に国庁があったことを証明している考古学資料と言える。一方，平安時代末期前後の遺物がその前代に劣らぬ量で出土することは，律令的政治（それに基づく国庁）が変質した後も，当地が相応に使われていたことを示している。また，奈良時代以前の遺構や遺物については，国庁設定当時の状況を知る手掛りとなるものである。奈良・平安時代以外で出土遺物が多い時期は，戦国時代である。この時期の溝等も検出されている。勝興寺が現在地古国府に移ってくる1584年（天正12年）以前に，当地に「古国府城」があったとされ，これに関連する遺構・遺物と推定している。国庁跡推定地付近は，勝興寺と奈良時代中期の大伴家持のイメージが強いが，これ以外にも，数々の歴史を持っている地であることが，これらの考古学資料が語ってくれている。

国分寺跡付近

平成元年度の調査を中心に，昭和62年度と平成２年度に一部調査を実施した。伏木地区の近代瓦工業の興隆に伴い，台地の表層を構成する粘土は掘削されていった。特に国分寺跡付近において激しいものがある。このように遺構の状態が良好ではないが，すべて破壊尽くされている理由ではない。粘土採集から免れている地点や，上部削平を受けつつも，遺構の下部が残っている場合もあった。

参考文献

富田景周　1821　『稲葉越枝折』（1933，石川県図書館協会版）

鴻巣盛廣　1936　『北陸万葉集古蹟研究』宇都宮書店

堀井三友　1937　「越中国分寺址」『史迹と美術』第80号　史迹美術同攷会

田辺武松　1942　『越中万葉かたかごの花』田辺武松発行

古岡英明　1956　「昔の伏木」『学習資料—伏木の文化』伏木小学校

和田一郎　1959　『高岡市史』上巻（高岡市史編纂委員会編）青林書院新社

古岡英明　1960　「危殆に瀕する勝興寺附近遺存の溜堀について(前)」『越中史壇』第19号　越中史壇会

古岡英明　1960　「危殆に瀕する勝興寺附近遺存の溜堀について(後)」『越中史壇』第20号　越中史壇会

湊　晨他　1967　「越中国分寺とその周辺の遺跡調査報告書」（越中国分寺とその周辺の遺跡調査団編）富山県教育委員会

黒川総三　1974　「乃生の山と大伴池主の公館」『万葉』第85号　万葉学会

上野章他　1983　『富山県小杉町・大門町，小杉流通業務団地内遺跡群第５次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

高岡　徹　1983　「小矢部川河口左岸台地の『館』・『立』地名について」『かんとりい』No.7 越中の歴史と文化を考える会

上野章他　1984　『富山県小杉町・大門町，小杉流通業務団地内遺跡群第６次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

酒井重洋　1984　「八尾町深谷字京ケ峰発見の中世古窯跡」『大境』第８号　富山考古学会

鬼頭清明　1986　「国司の館について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集　国立歴史民俗博物館

西井龍儀他　1987　『北陸の古代寺院—その源流と古瓦』（北陸古瓦研究会編）柴書房

大久間喜一郎他　1990　『ふるさとの万葉，越中』（高岡市万葉歴史館編）柴書房

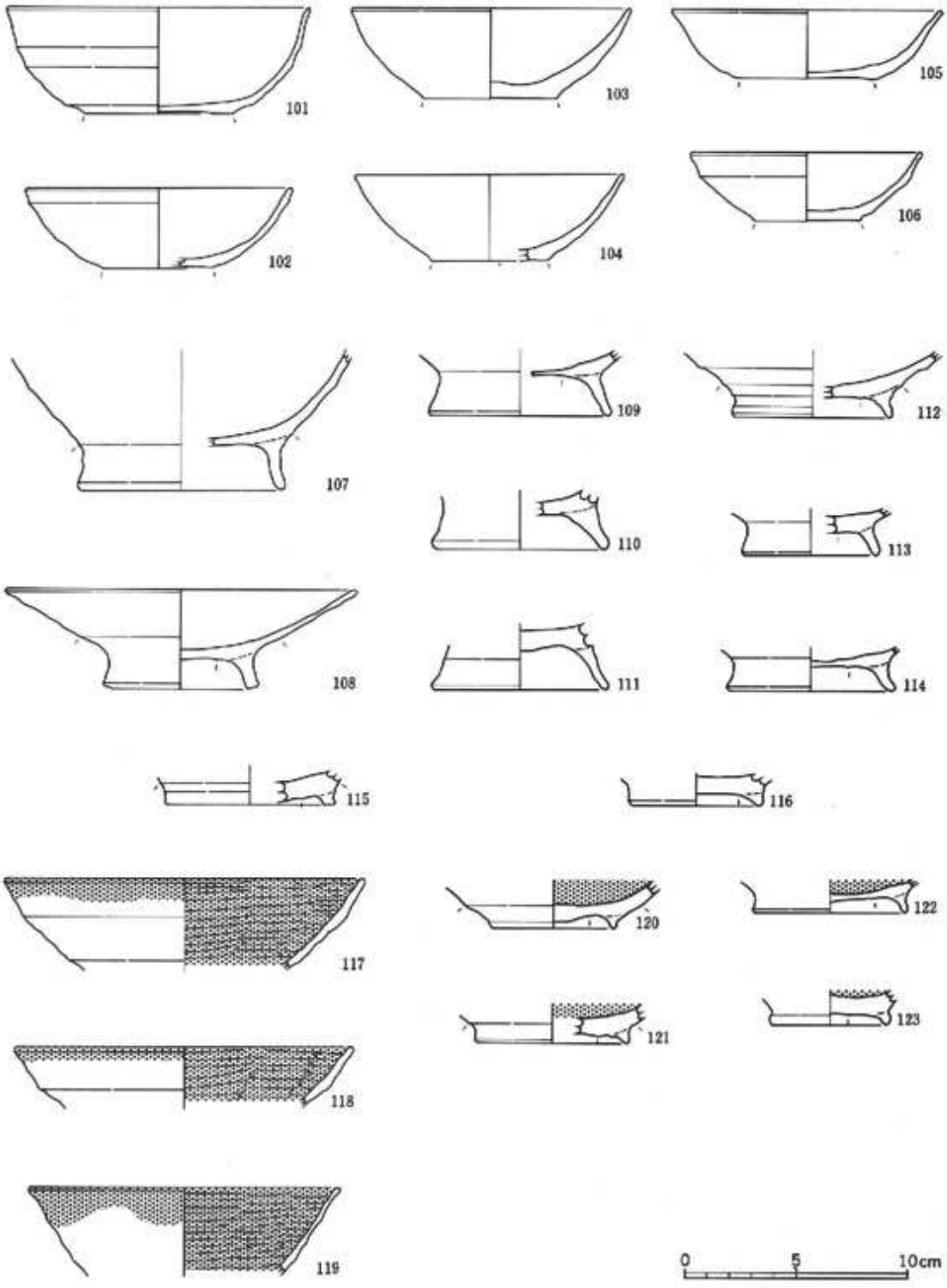
酒井重洋　1990　「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯』北陸中世土器研究会

調査参加者名簿

発掘　岡島敏雄，河合一郎，仁幸子，西海由雄，田中忠男，高田えみ子，中町清隆，船木悦子，前田武國，松井弘子，水外一郎，宮下真知子，和世利之

整理　五十里文子，岡村幸枝，沢田優子，菅谷幸恵，高田えみ子，船木悦子，宮下真知子

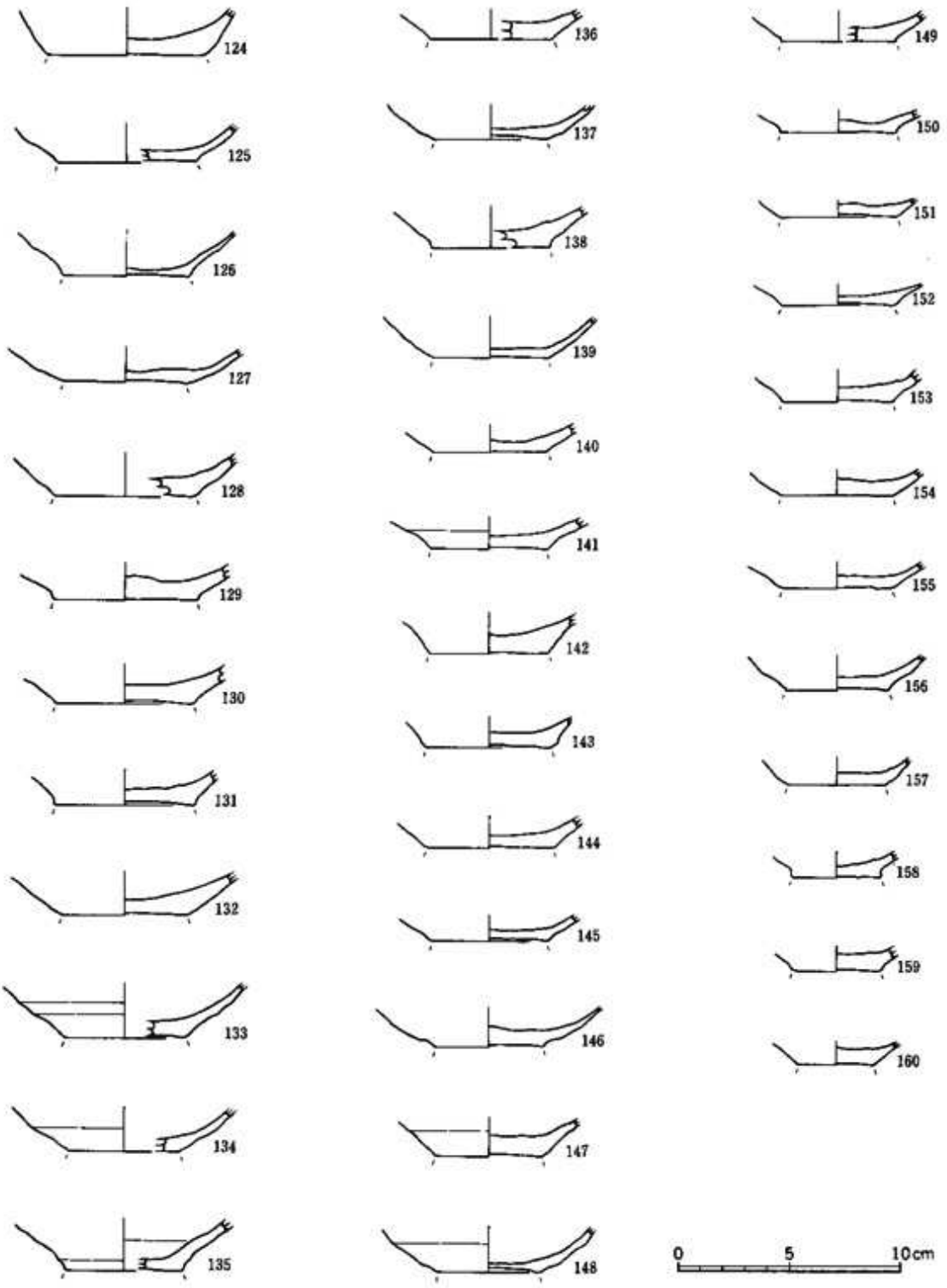
図面一　遺物実測図　測候所地区



土師器

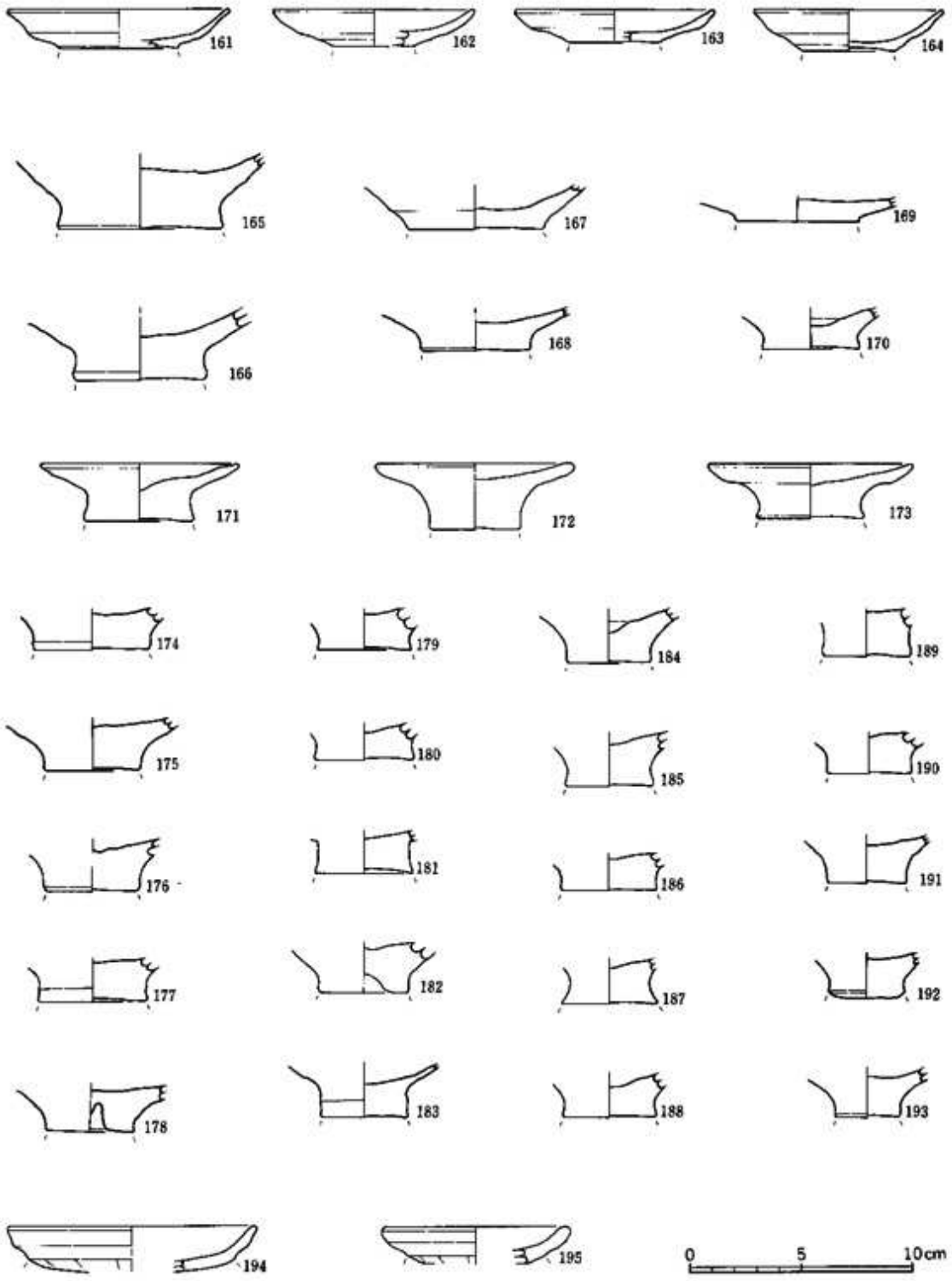
縮尺1/3

図面二　遺物実測図　測候所地区



土師器

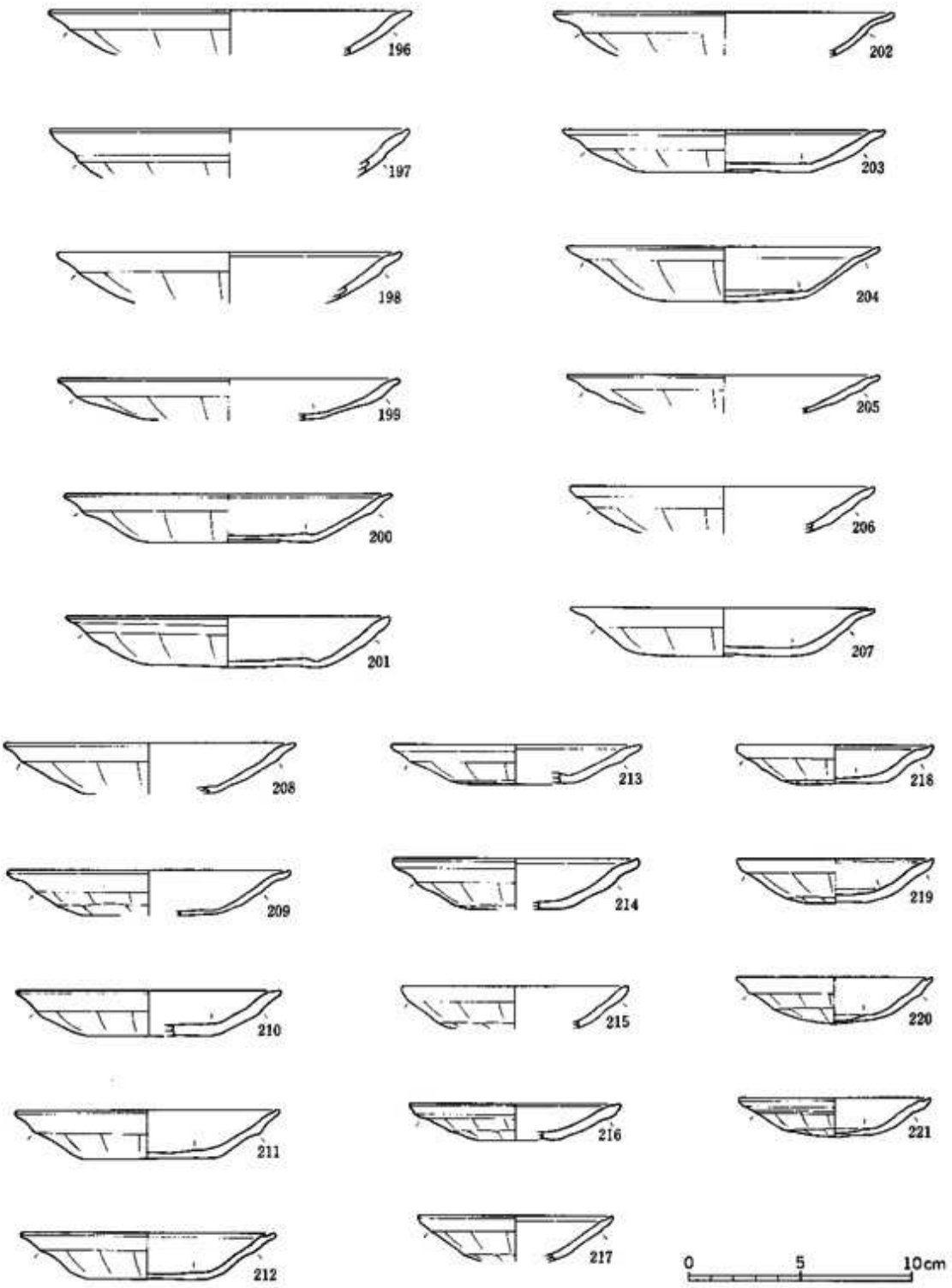
縮尺1/3


161
162
163
164
165
167
169
166
168
170
171
172
173
174
179
184
189
175
180
185
190
176
181
186
191
177
182
187
192
178
183
188
193
194
195
0
5
10cm

土師器

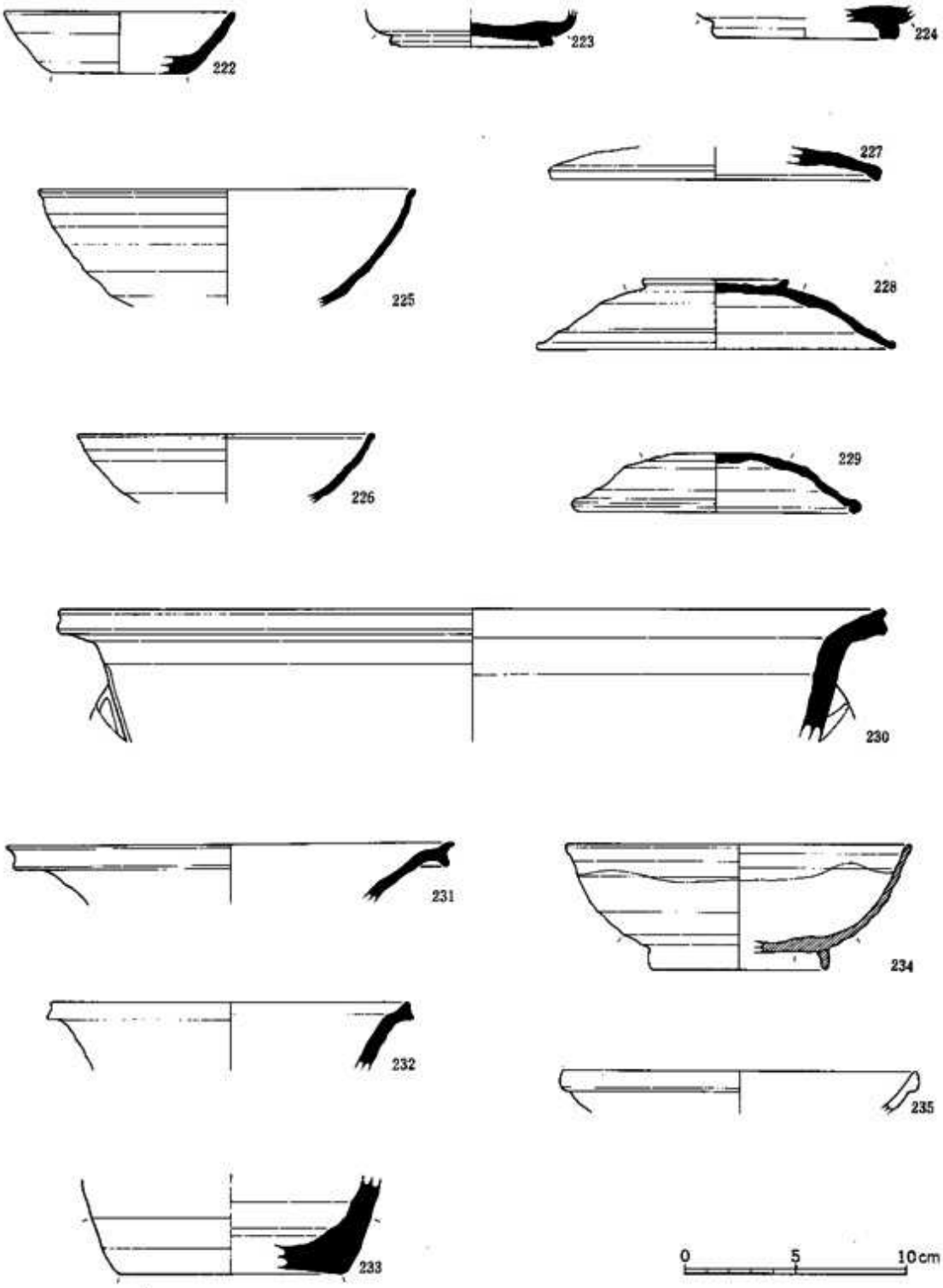
縮尺1/3

図面四　遺物実側図　測候所地区



土:師器

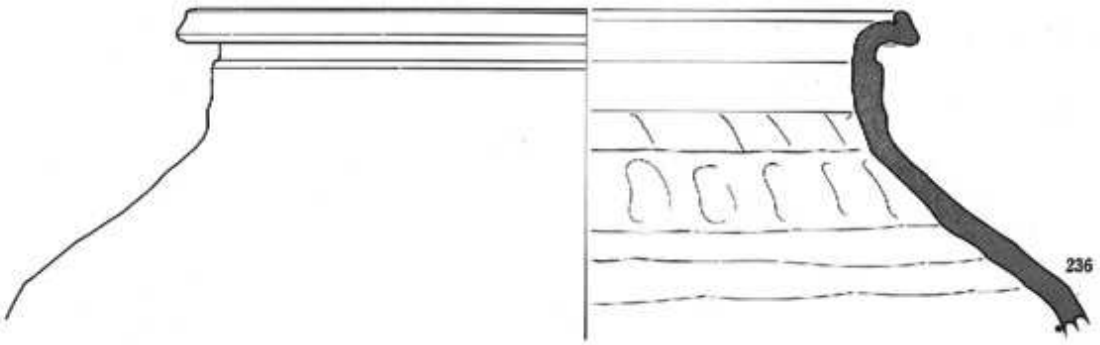
縮尺1/3

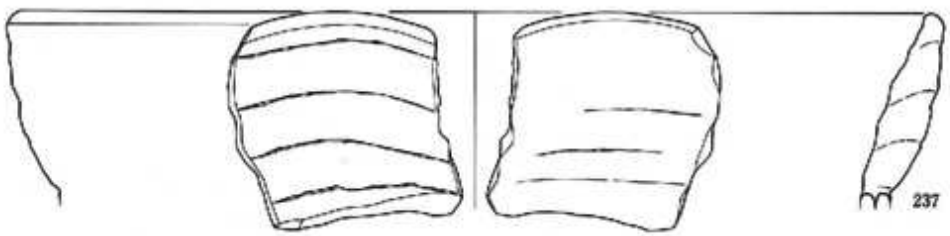


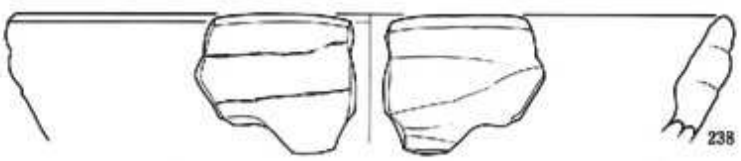
須恵器；222～233，灰釉陶器；234，白磁；235

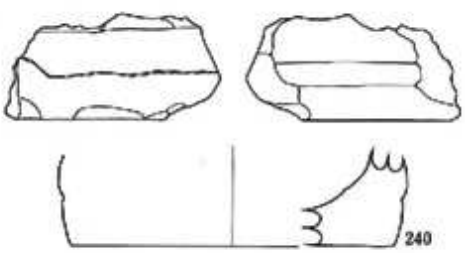
縮尺1/3

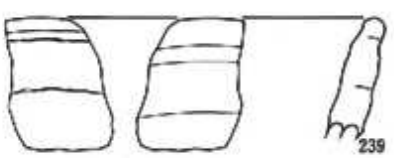
図面六　遺物実測図　測候所地区

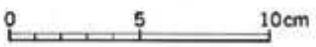












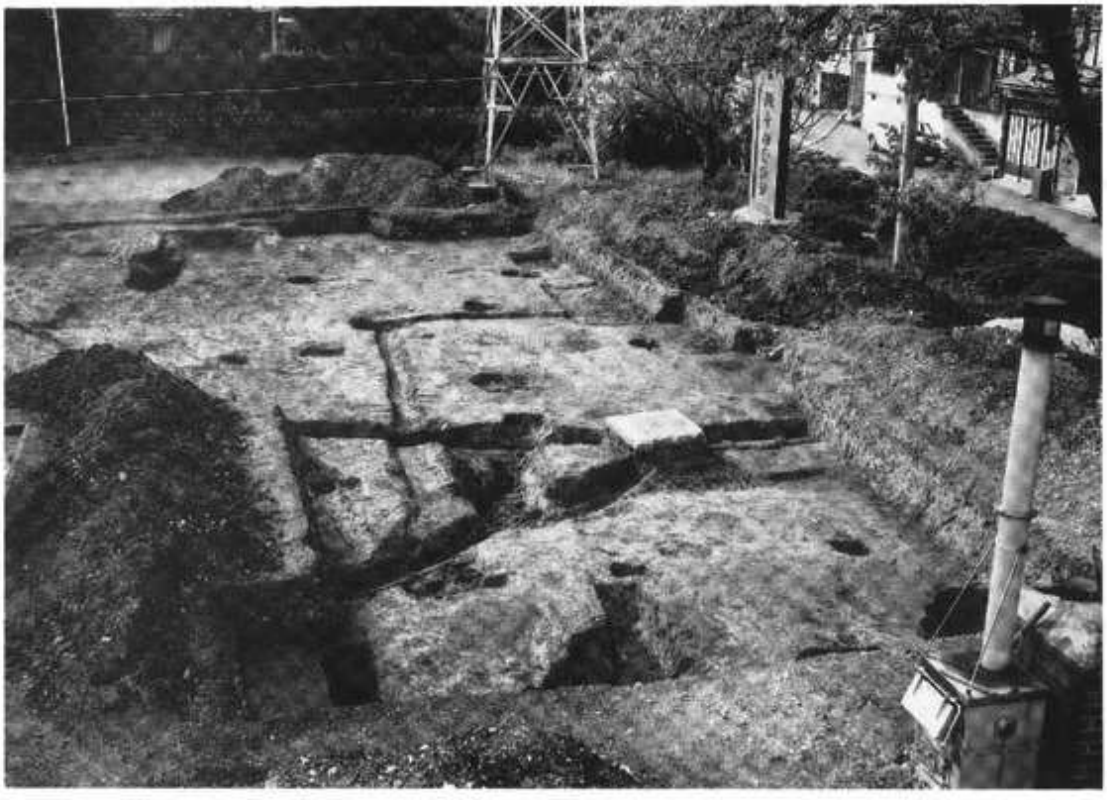
八尾窯の製品；236，製塩土器；237－240

1．遠景（北東上空）

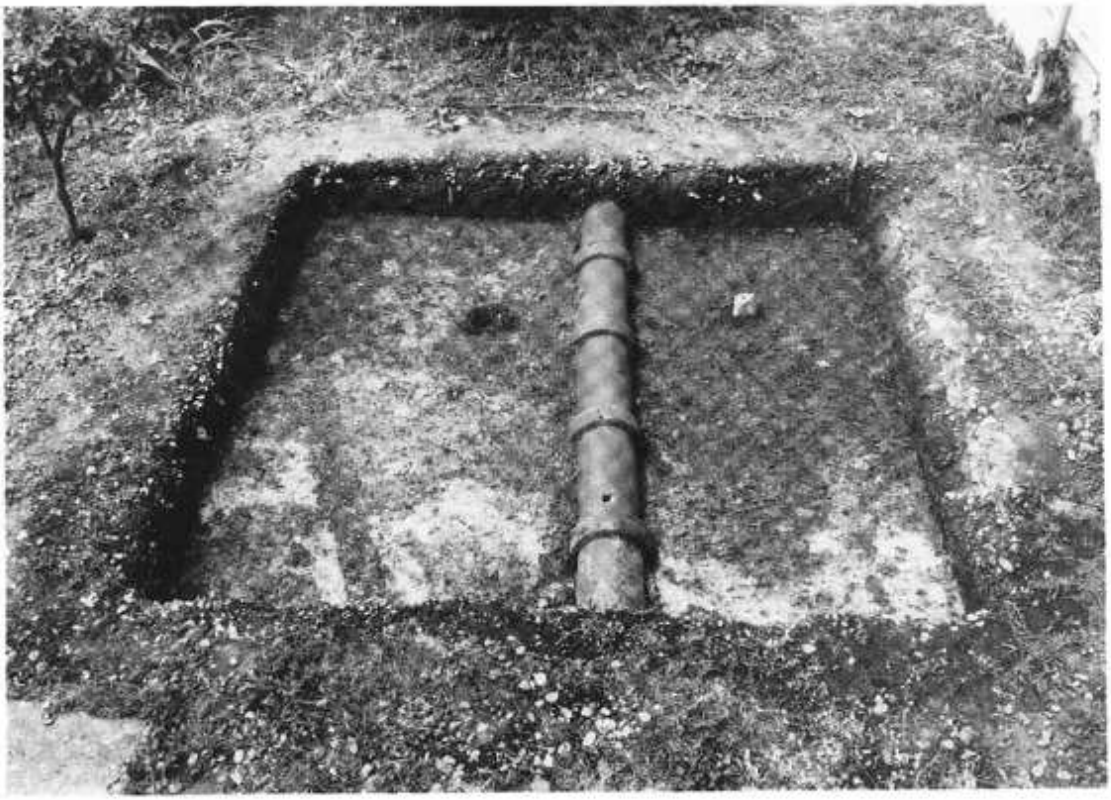
2．遠景（南西上空）

図版二　遺構　測候所地区

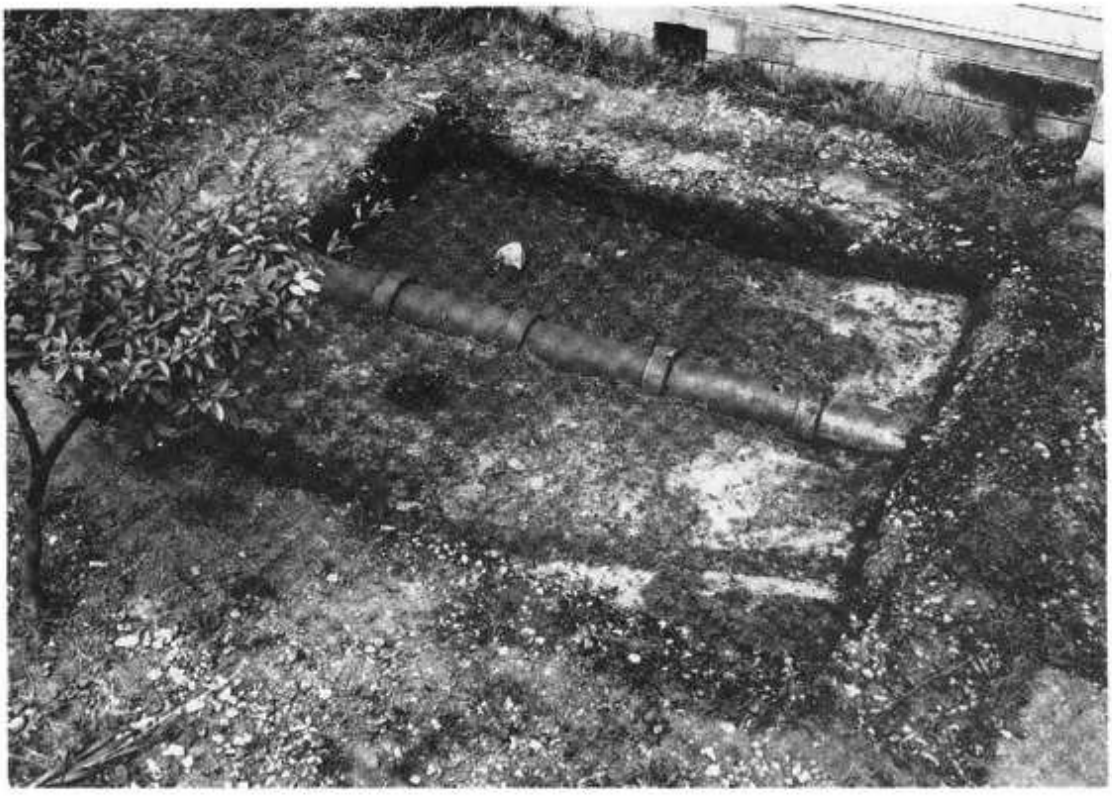
1．北側トレンチ全景（西）



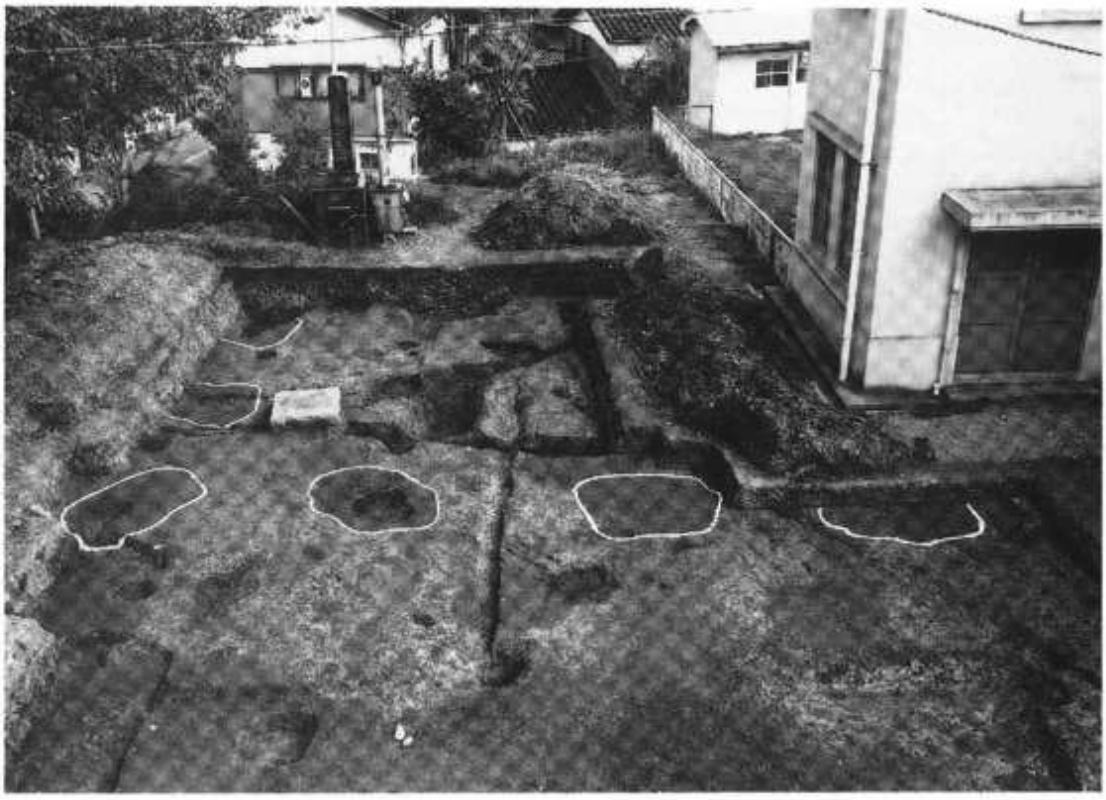
2．北側トレンチ全景（東）



1．南側トレンチ全景（東）

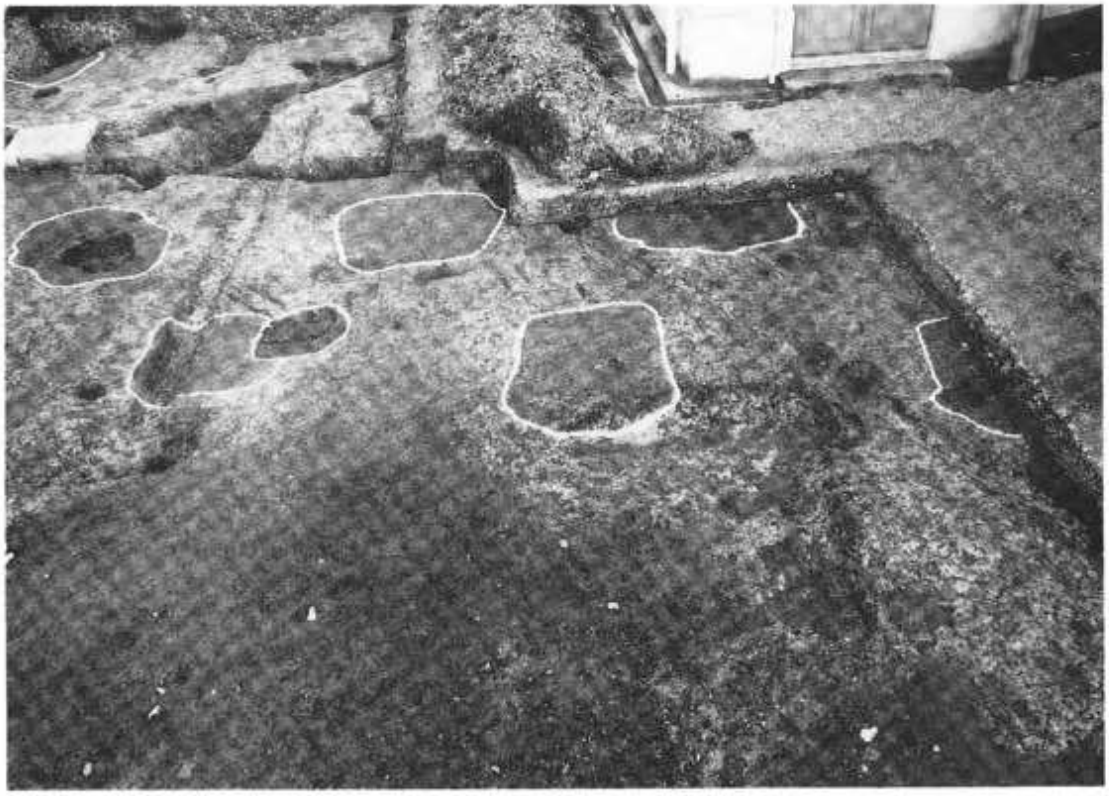


2．南側トレンチ全景（南）

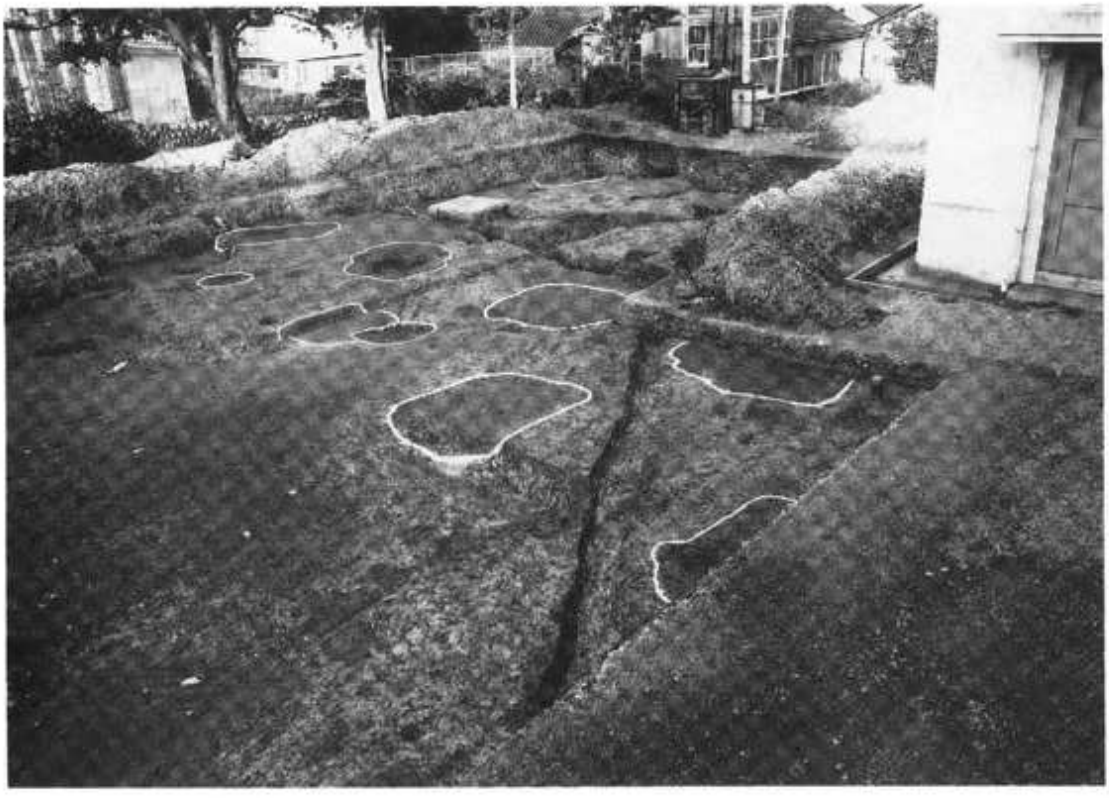


1．SB01全景（西）

2．SB01全景（東）

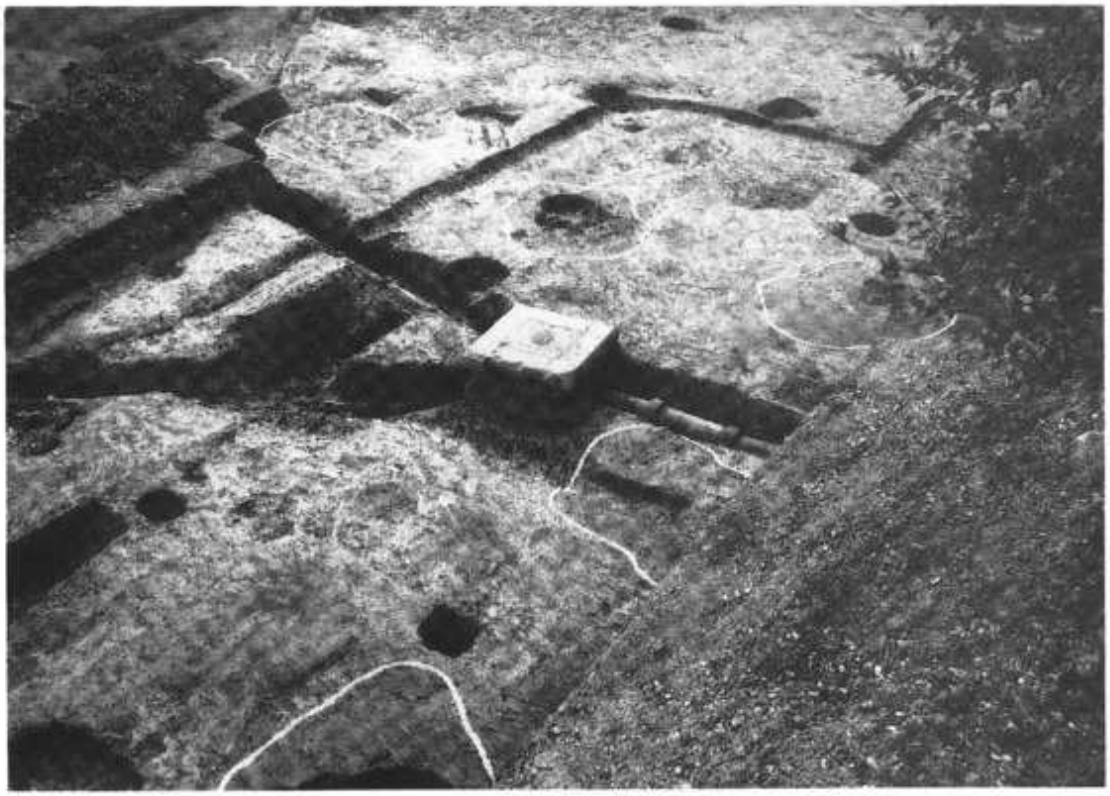


1．SC01全景（南）

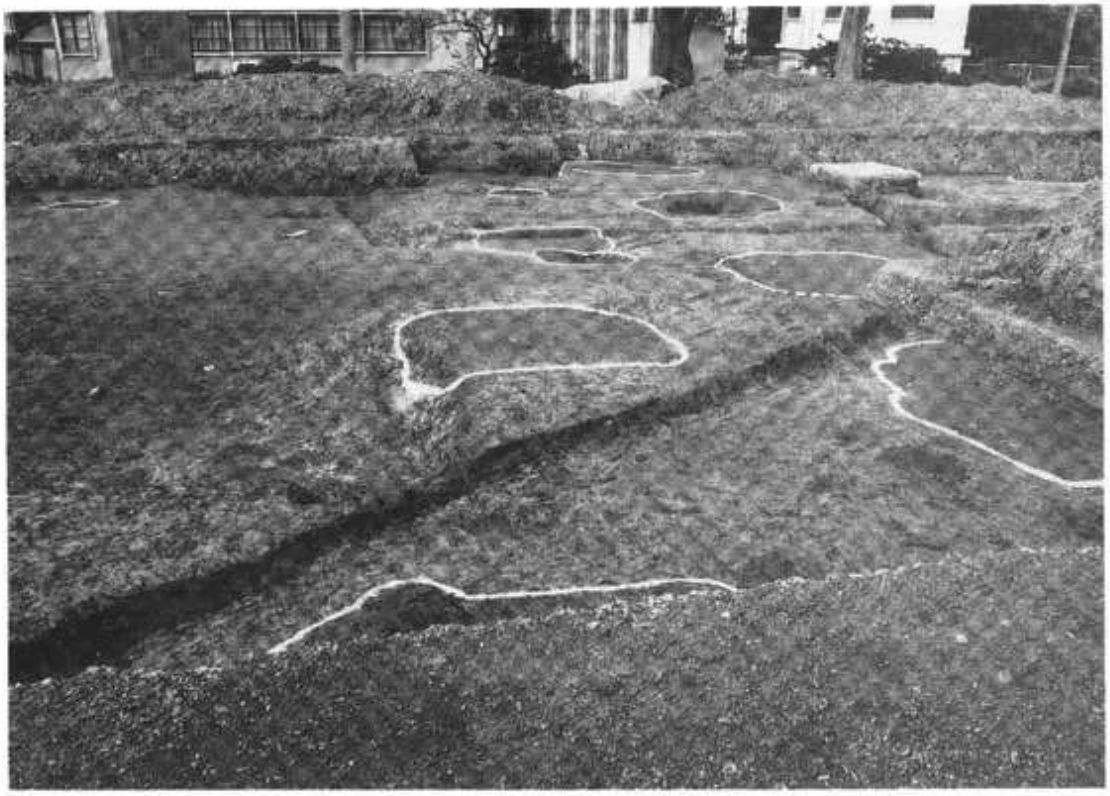


2．SC01全景（南西）

図版六　遺構　測候所地区



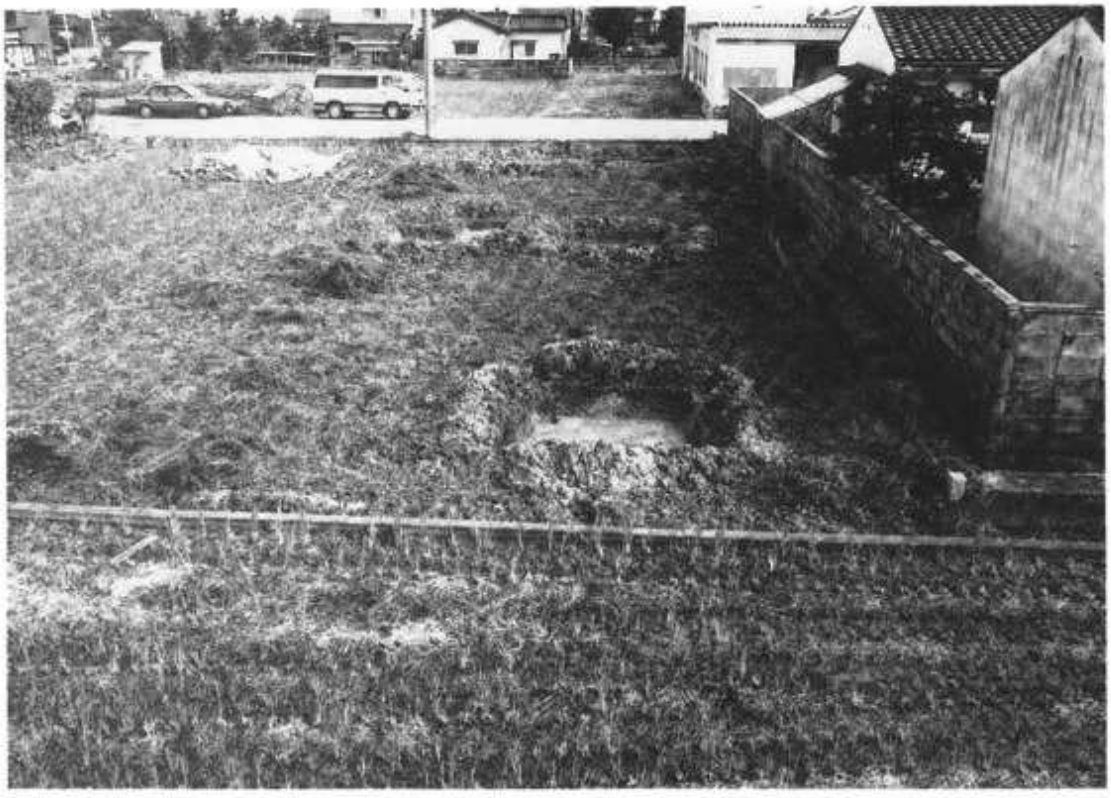
1．SB01近景（北東）



2．SC01近景（南）

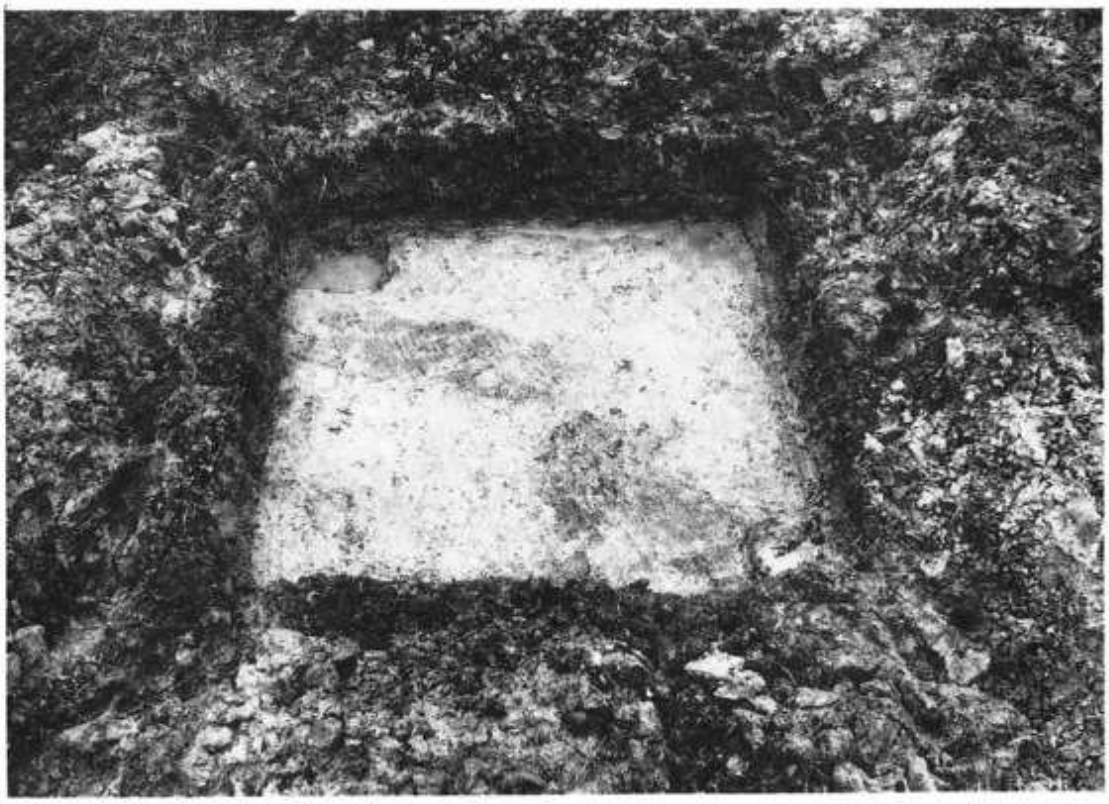
図版七　遺構　芹沢貢地区

1．全景（東）



2．全景（西）

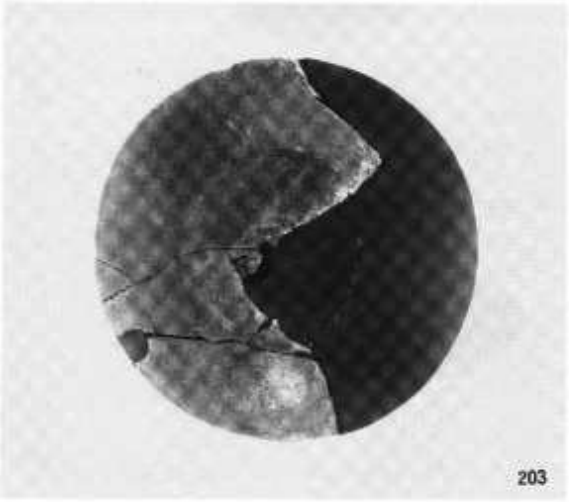
図版八　遺構　芹沢貢地区



1．東側トレンチ近景（東）

2．中央トレンチ近景（東）

201


203

203

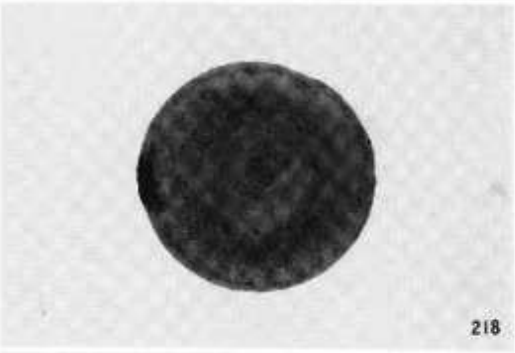
210

211

212

103

106


218

218

219

220

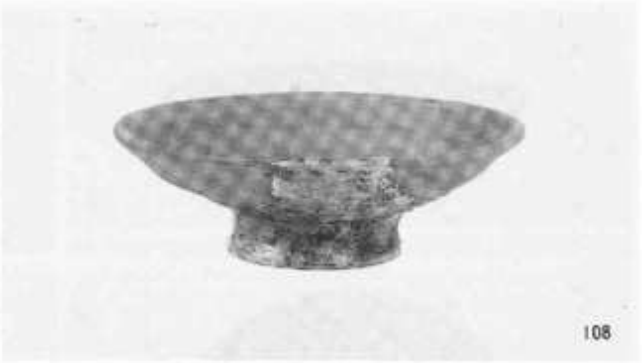
221

164

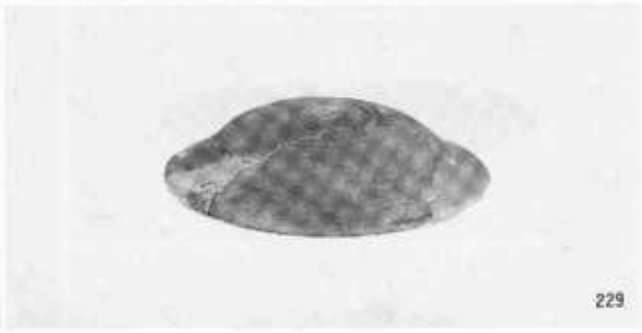
171

172

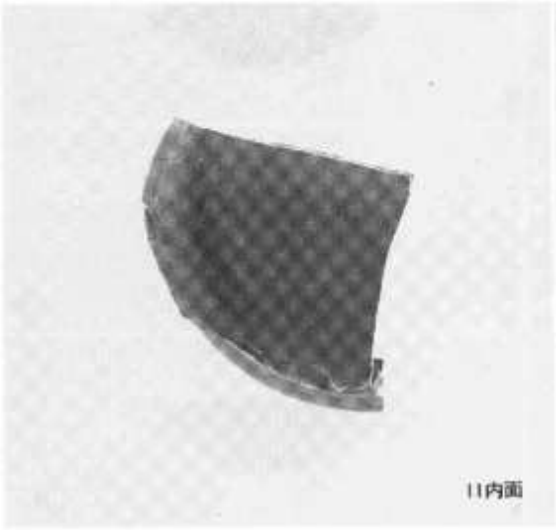
173

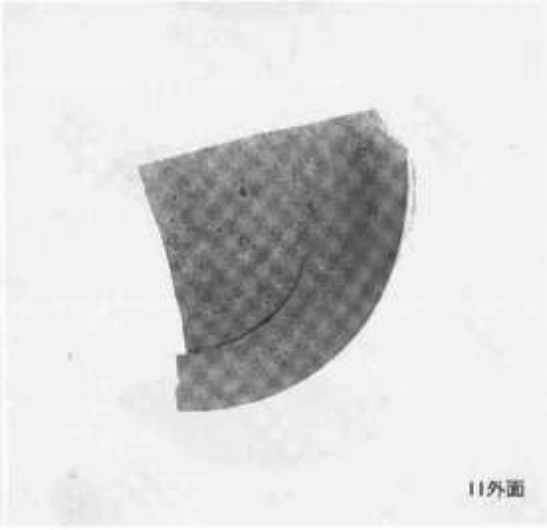

108

228

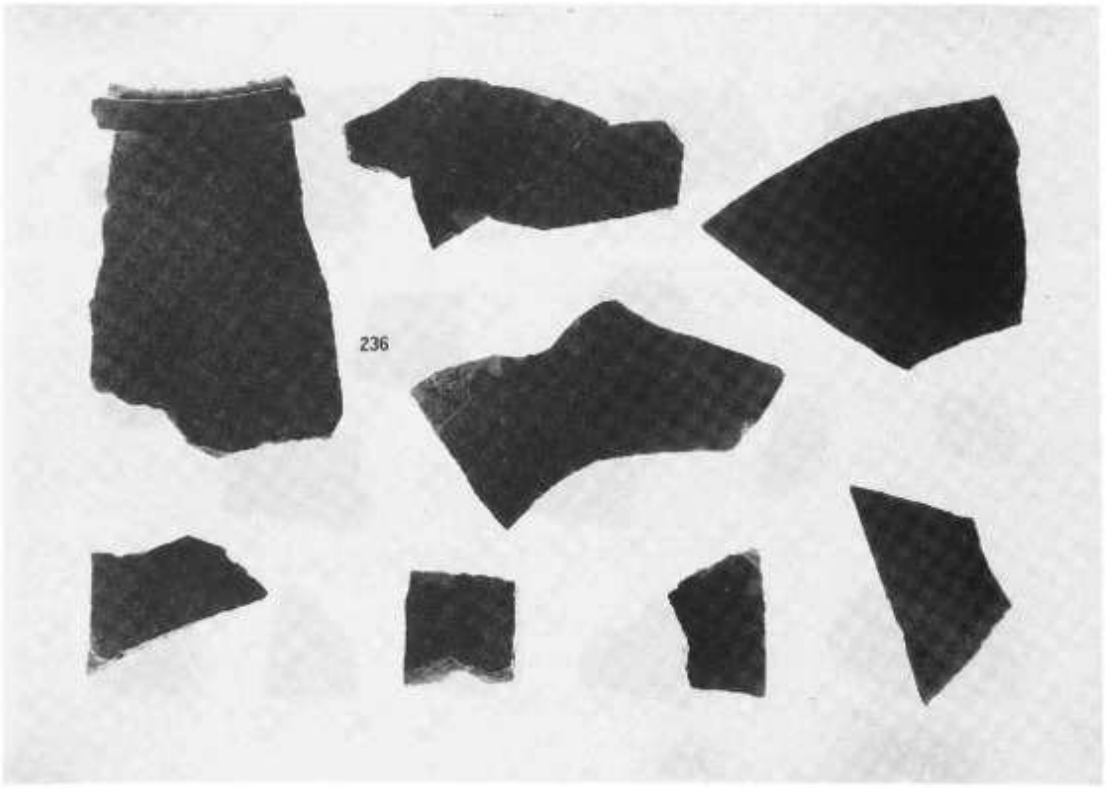

229

1．土器

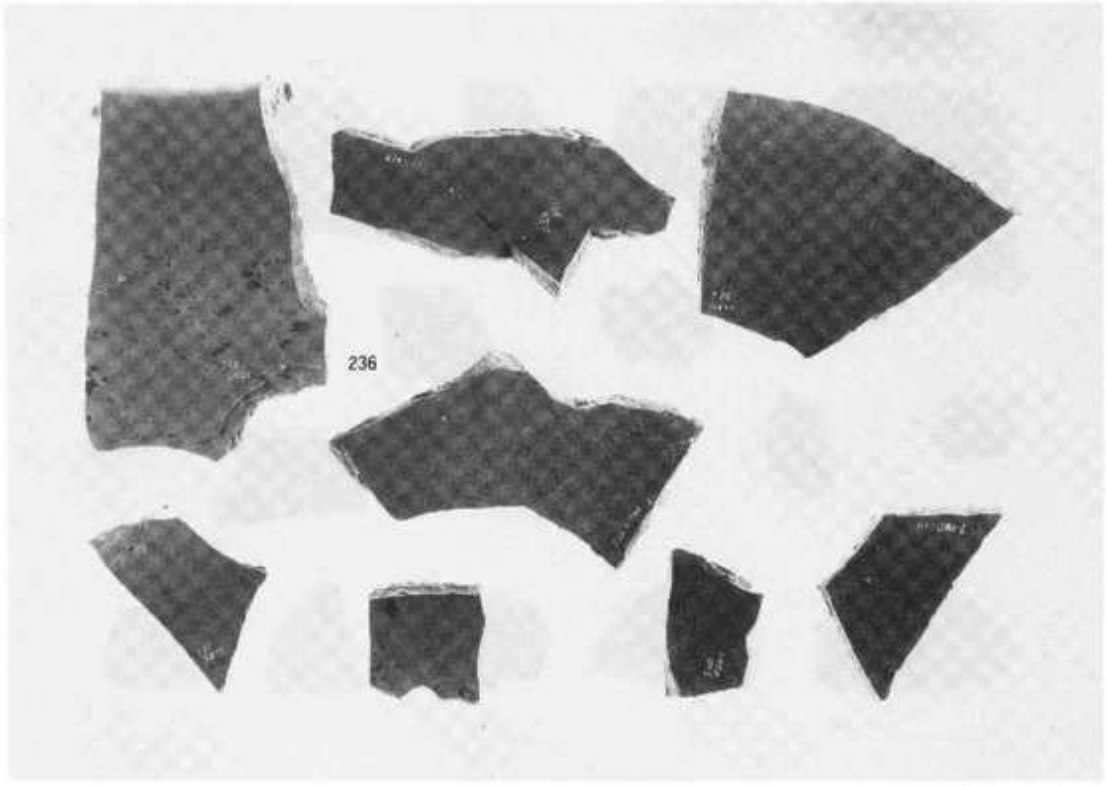

11内面


11外面

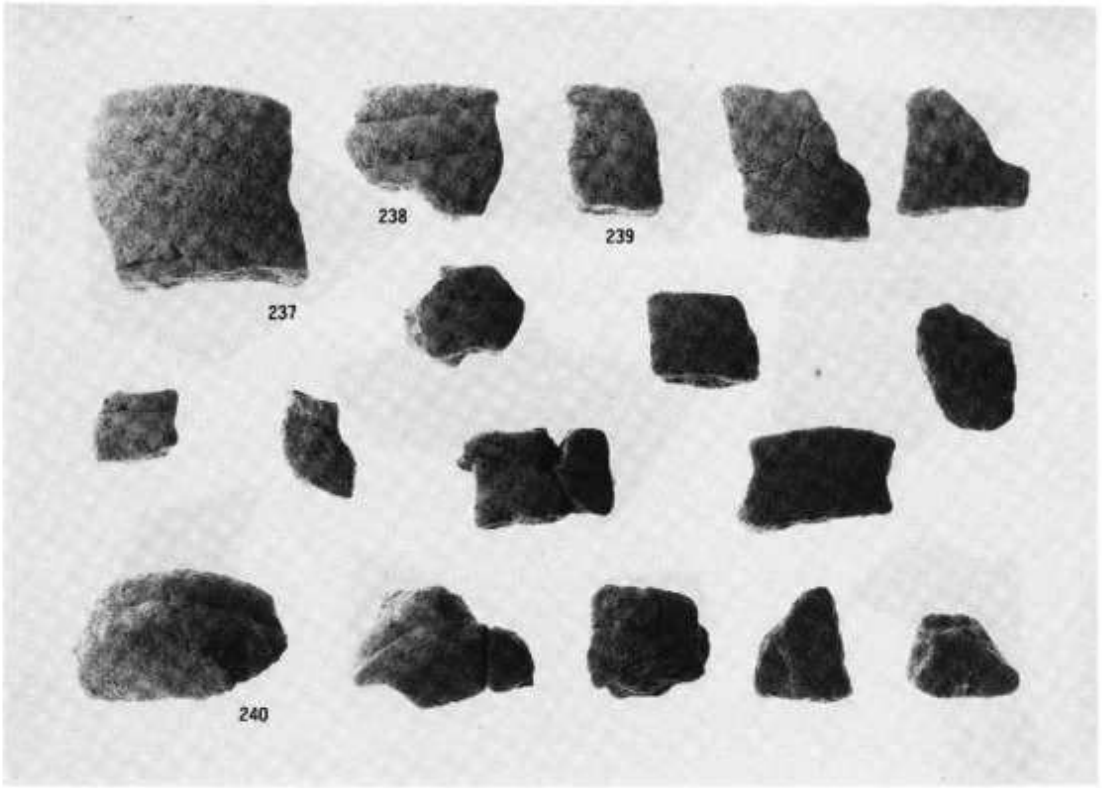
2．円面硯



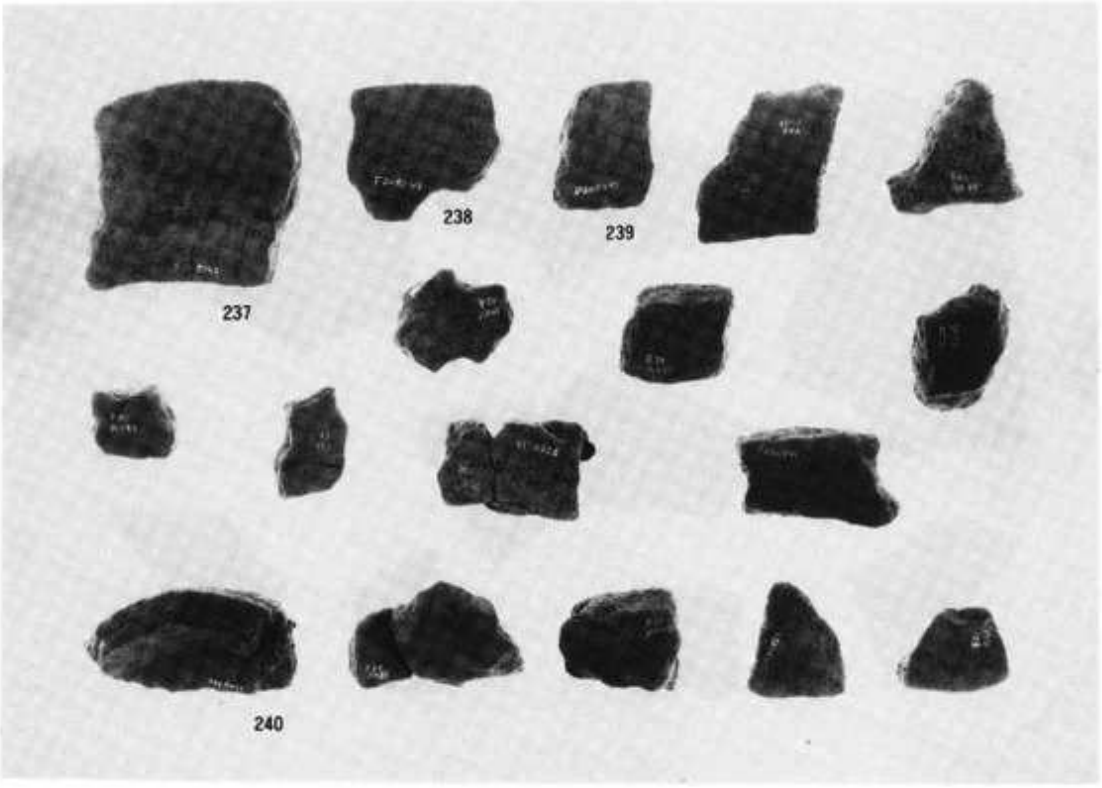
1．八尾窯の製品（外面）



2．八尾窯の製品（内面）



1．製塩土器（外面）



2．製塩土器（内面）

高岡市埋蔵文化財調査概報第15冊
越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ

1991年3月31日

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7　30
印刷所　小間印刷株式会社
富山県高岡市荒屋町3